
紅朧 -べにおぼろ-

DAISY.Roses

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅臙 - べにおぼろ -

【Nコード】

N5855K

【作者名】

DAISY・Rosess

【あらすじ】

主人公、城東紫苑はある日、術者により異世界へと飛ばされる。

そこでは人間と鬼が争っており、紫苑は鬼を討つ鬼討士の姫神子として鬼と戦う羽目になってしまう。しかし、鬼たちの様子は紫苑が鬼討士たちから聞いた話とは違って… 《紅臙シリーズ本編》

12月くらいからまた書きはじめます。楽しみにして頂いてる皆様、大変お待たせしました。

序 闇に染むは

闇。

どこへ向かっても闇。

ここは、何処？

走っても走っても闇は切れない。限り無い黒。

手を伸ばしても何も掴めない。

もしかしたら、闇に包まれているだけなのかもしれないと思うほど、果てが無い。

走って、走って、どこまで走ったんだろう。

転びそうな足取りでも走り続けた。ここにいたらいけない気がして。

そのうち、何処から現れたのか、草の茂った場所に変わった。草と言っても身の丈より上まであるうっそうとした場所。

しかも、この草は触れると身体に傷がついてしまう葉を持っている。地味な痛みを感じながら前へ前へと進んだ。

草を掻き分け走ってもまだ世界は闇。

明けない夜は無いというけど、そんな言葉じゃ治まらないような気がして。

行かなきゃ、行かなきゃ、ここにいてはいけない。

頭の中で何かが繰り返す。

ふと、闇が少し明るくなった。

足を止め、真っ黒な天を見上げる。

霧のように幾つも重なったベールの下から満月が顔を覗かせていた。

身体が凍った。

血糊を塗り付けたような紅い朧月に。

「っ……………!!」

弾けるように目が覚めた。目覚まし時計が鳴るにはまだ二時間も早い。

「ゆ、夢…」

そう納得すると深く息を吐き出した。

また眠る気にもなれなくて、仕方なく布団に潜ったまま目を開いていた。

漆の闇に突然と現れた紅い朧月。

あの紅さが目蓋の裏に焼き付いてしまっているから。

身体の底から恐ろしい、おぞましいと思った。

あんな夢、もう見たくない。

そう思っても夢魔は容赦しないのはわかっていた。

一 異世界へ

静かにはった水面に、花びら一枚が浮かんだ。
見上げると深く曇った藍の空に薄紅の花が咲き誇っていた。

「……夜桜、か」

朱塗りの杯に浮く桜の横に自分の顔が水鏡で並ぶ。朱塗りの器のくせにこの紅い髪をはっきりと映しだしていた。そして、この鮮血のような紅い瞳も。

水鏡が映す、除く顔、花びら、その後ろにたたずむ夜空。夜空の数少ない雲の切れ目から、月が顔を覗かせた。

「っ……!!」

酒が庭の土に染み込み、虚しく杯が転がった。

「朧、月……」

肩で息を繰り返し、片手で顔を覆った。

水鏡に映った自分の顔、花びらの向こうに現れた朧月 ……。

どんな夢を見ても学校には行かないといけない。

「いつてきまーす」

お気に入りのスニーカーを履いて登校する。通う学校は私立のそこそこ名門高校。そこそこでも名門だから入試は難しかったのに、そんなり入れた。実際は公立の滑り止めのつもりで受験したのに、受かってしまったから両親にここへ行けと言われて入ったんだけど、勉強がついていけない。やっぱり公立にするんだった。

「よっ」

後ろから声がした。

「ここらへん、友だちの家無いから他の人の会話か。」

「いや、おいつ、ちょっと待ておぬし！」

おぬし……？今時そんな言葉使う人いるんだ。ああ、歌舞伎役者と

かなら…

「おい、お前じゃ！振り向かんかあ！」

足を止めて振り返った。ここまで無視をされて可哀想だし、古い言葉を連発する人も気になる。

けれど、振り向いた視界にはそれらしき人はいない。

「……いない？」

「おるわーっ！！！」

憤慨しきったようにそれは地団駄を踏んだ。下を向くと視界に入らないほどの小さい子どもが腰に手を当てていた。

「わしの呼び掛けを無視するとは、なかなかいい根性をしとるではないか！」

かなり憤っているようみただけど、その小ささもあって、

「かつ、かわいいっ」

と抱き絞めてしまうのは女の子の本能だと思う。

「何っ？離せ、離さんか！」

腕の中で暴れているがメートルも身長が無いのでは女子高生には勝てない。

「離せと言つとるだろうが！こらあつ」

やっと解放してもらった所でそれは人差し指をビシッと指した。

「お前に用があつて参つたのだ、城東紫苑よ」

「何で私の名前を？」

すると、胸をそらしてみせた。

「何を戯けたことを。わしは天才術士の阿来じゃ。わからぬものなど無いわ」

術士…？今時こういうコいるんだ。自然と頭を撫でてしまった。

阿来はその手を「子ども扱いするな」と払いのけると再び指を指してきた。

「わしも早く元の世界に帰りたいたのでな、手っ取り早く言う。おぬし、今からわしとこちらの世界に来るのだ」

「こちらの世界？」

よく見れば阿來は見たことの無い着物のようなものを纏っている。
「……え？でも私今から学校だし」
頭が整理される前に阿來は手を引つ張った。
「来るのじゃ、わしらの世界へ」

光に包まれたかと思うと足に土の感触が無くなり、吹っ飛ばされたかと思えば視界に映ったのは真つ青な空で、私はそこから落っこちた。

「いったーい、ちよつと阿來、何するの!？」

あまりに一瞬の出来事で構えることも出来ず、おもいつきりしりもちをついた。

「阿來ー？ちよつといるんでしょ、無視しない、で…」
息を飲んだ。

さっきの住宅街とは全く違う風景。真つ青な空はいいとして、落ちた場所は木に覆われた静かな所。傍には澄んだ水を湛えた池があって、そこに落ちなくて良かったと思つた。

「……ここ、どこ？」

立ち上がり辺りを見渡すけれど、人影らしきものは無い。

「阿來？」

あの小さい姿も無かった。

「ここに飛ばしていなくなるなんて」

ぶつぶつと文句を並べながら制服についた土を払う。とりあえず、ここが何処なのかわからないといけない。

留まっただけでも仕方ないので、生い茂る木々の間を歩いた。ひんやりと静かな空気が漂う。鳥が鳴いて羽ばたく音が響き、住んでいた場所とはまったく違うことを教えてくれる。

しばらく歩いていると黒い壁が見えた。

誰かいるのかもしれない。なら、ここが何処か教えてくれるかも。そんな期待を寄せて、壁に近づくとそれは屋敷を囲む高い塀だっ

た。しかも、屋敷自体が大きい。こう大きくあると訪問をするのは気が引けてしまう。でも、仕方ない。

玄関を探し、塀を沿って歩いてみると目の前に黒いものが落ちた。何かと目を向けると、

「キヤアアツ！！」

一目散に木々の中へと逃げ込んだ。屋敷の塀の向こうから、「何だ？」「塀の向こうに曲者がいる！」「女だ！」と声があるのを何故かはつきりと聞き取れた。

「私が行こう」

塀の向こう側で凜とした声が響いた。その声の主は軽々とその塀を越えると森の中へ入っていった。

ダメだ……、足がもう…。

息を切らして木々の間を走る。時折、木にぶつかったり転んだりした。それでも後ろから追ってくる気配をひしひしと感じていた。

あの時、目の前に落ちたのは人の死体だった。無残にも手足はひしゃげ、目を剥き、内臓が見えそうなほど身体がぼろぼろにされていた。あれで悲鳴を上げないわけ無い。

あの屋敷に何かがあるのかわからないけど、捕まってあんなにされるのは嫌だ。

「阿來…、阿來は…」

どこにいったの？

そう叫ぶ前に土のぬかるみに足を滑らせおもいきり転倒した。痛みでくらくらする頭を抱え、這いずるように再び走り出そうとして、肩を掴まれた。

「ひっ…」

悲鳴を上げそうになる口を押さえられ、反抗しようとしても体力を使い過ぎて力が入らない。

「助かりたければ静かに」

耳元で、そつとささやかれた。その落ち着いた声音に、何故か心が安らかになった。

その主は私を太い幹の陰に座らせると、あとから追ってきた仲間
に話した。

「あれは私が始末しておいた」

「そうですか、ならばその曲者の体は何処に？」

「私の術で塵と消えてしまつてな。あまり力の無い者だつたようだ。
まあ、あれだけで悲鳴をあげるのだからな」

「わかりました。では、共に屋敷へ戻りましょう」

「いや、君たちは早く戻つてクロウに済んだと報告しておいて」

「はい、では先に失礼致しますぞ」

走り去る足音を聞きながら、それと共に鳴る鋼の音に鳥肌がたつ
た。

やっぱり、殺すつもりだつたんだ。

逃げようかとあの会話の間考えたけれど、あの人は私をかばつて
くれた。だから、言われた通りに静かにした。

けど、あんなものを見るとあの人たちは恐怖でしかない。

「……君も困つたものだな」

いつの間にか目の前に助けてくれた男の人がいた。顔を覗いてく
るけど、それより、その人のとてもきれいな青い髪に目がいった。

青いというより碧いと言つたほうがいいような澄んだ色。瞳は髪よ
り深い、水底の碧をしていた。

「君は格好から言えばこの世界の人間ではないようだ。あまりここ
にはいないほうがいい」

彼は手を差し出して立ち上がるのを手伝つてくれた。ガクガクと
鳴る足にそつと触れた。

「……？」

その触れた場所から疲労が抜けていく。

「その場しのぎみたいなものだ。今日はゆつくり休みなさい」
肩を抱かれ、連れていかれるままに従つた。

「寒くないか？」

「大丈夫、です」

疲労を取つても支えられて何とか歩いている状態、転んで打った場所が地味に悲鳴を上げていた。

「体に無理をさせてはいけない。つらければ言うのだぞ」

頷いて、その人の顔を見た。本当にきれいな顔をしている。うっかり見惚れていると、足をひねった。

「きゃ……っ」

肩を抱いていてもらったので倒れることは無かった。

「あ、ありがとうございます」

「礼はいらない。足を痛めたようだ。背負う」

「いいですよ、大丈夫ですから」

「悪いが、そうしたほうが早く着く」

「……………」

さすがにこうも言われると従うしかない。

「……ごめんなさい」

「何故謝るんだ」

「……迷惑かけているなって思って」

おんぶされた状態で静かに咳く。それに対して、彼はため息をついた。

「迷惑をかけているのは君ではない。君をこちらに連れてきた奴らだ。文句なら、そのキトウシの長老にでも言っただれ」

「キトウシ……？」

「知らずとも、すぐわかるだろう」

「そうですね」

キトウシという言葉にトゲを感じたのは気のせいかな。

彼はその後、何も言わなかった。

「……………」そういえば、あの、私、どこに連れてってもらってるんですか？」

一番気にしないといけないことに今さら気付いた。

彼は静かに答えた。

「人間の所だ」

「……………はい？」

「人間の所だと言っている」

「いや、そういう意味じゃなくて」

「人間の所だ」

彼はそう貫き通した。

「詳しいことはそこできいたらいい」

その頑なさにも再度質問する気は起きなかった。何だか、この人の痛い場所を刺してしまうような気がして。

「ほら、あそこだ」

森が終わった所でその人は降ろしてくれた。指の指す方向に村のような集まりが見える。

「あそこに行ったらいい」

「あなたは行かないんですか？」

一人で行くのが不安で試してみよう。その人は首を横に振った。

「私は行けない。君だけで行きなさい」

「どうして行けないんですか」

その時の彼の顔は、この目に焼き付いた。

「行きたくても、どうしても行けないんだ」

優しい優しい悲しんだ表情。その視線はこちらではなく、村のほうに注がれていた。

「…じゃあ、行ってきますね」

「ああ、ただ、私のことは言っただけじゃいけない。理由は言わないが多分、また、どうしてもときかかると思ったのだから。」

「わかりました」

ここは素直に引いた。

「じゃあ、またどこかで会いましょうね」

「……………」

彼は応えなかった。

村へ何歩か進んで風が吹いた。ふと、振り返ってみると、そこには誰もおらず静かに森があるだけだった。

「紫苑ー、紫苑ー」

村のほうから声がする振り向くと、阿來の小さな姿が走ってきた。
「紫苑、無事で良かった。すまぬ、わしの術の力が足りなかったばかりに……」

涙目ですがりつく阿來の頭を撫でてあげる。文句を言ってやりたかったけど、これじゃあ言い切れない。反則だ。

「すまなかったなあ、紫苑、どこにいたのじゃ？」

「えっと、その森の中に」

「なっ、なにーっ!？」

阿來の血相が変わった。

「おぬし、よく無事じゃったな!」

自分でもそう思ったけどきいてみる。

「どうして?」

阿來は答えた。

「だって、あの森は、」

阿來の顔に陰が差した。

「鬼の巣窟だからじゃ」

二 鬼討士

鬼。

そう言われて思いつくのは桃太郎とか昔話に出てくる金棒を持ち、頭に角を生やした人ではないもの。

悪く書かれることが多いけれど、「泣いた赤鬼」の青鬼のような優しい鬼もいる。

では、あれはどちらなのだろう。

助けてくれたけど、落ちてきた死体を考えればどつちなのかかわらない。

でも、あの人は、あの助けてくれた人はそうであって欲しいと思つてた。

「よく参られました、我らが姫神子よ」

深々と頭を下げて土下座体勢に入る老人たちに、こちらも下げずにはいられない。

あの後、阿來に連れられて村に入った。村の人にはこの格好で土で汚れていたから不信な目を向けてきたけど、阿來の姿を見ると何か挨拶をしてきた。何か期待されているらしい。そして、ある屋敷に入ると着物に着替えさせてもらった。ぬかるみに転けたからスニーカーが泥まみれで凹んだけどね。着替えると今いる部屋に通された。阿來は着替えている間に説教をされていたみたいで泣き腫らした顔をしている。

「阿來が大変失礼いたしました」

阿來の隣に座る男の人がこちらも深々と頭を下げてきた。

「本当は私がお迎えに参る予定だったのですが、急用が出来まして、代わりに阿來を遣わせたのです。しかし、あなた様をこのような目にするなど城東を名乗っているのに恥ずかしくてたまりません。本

「当に申し訳ありません」

「黒髪を後ろに束ねたその人は、阿來の頭を押さつけえるようしてに謝らせた。」

「あの、もうそれはいいですから」

「阿來の頭から手を離させる。ああいう乱暴なものは嫌いだし、無理矢理謝られるのはいいい気がしない。」

話を変えた。

「……なら、あなたは阿來と同じ術士なんですか」

「ええ。申し遅れました、私は城東伏水きとうふせみと申します」

「私と同じ苗字なんですね」

「城東、ですか。キトウシである者は皆、苗字が城東なのですよ。」

「この場にいる者、阿來も苗字は城東です」

「……キトウシ？」

「そういえば助けてくれた人が言っていたような。」

「鬼を討つ士、と書いて鬼討士と読むのです」

「鬼討士……」

伏水は頷いた。

「鬼というのはおとぎ話に出てくるような鬼ではありません。おとぎ話の鬼は生まれながらの怪物、妖なのです。ですが、ここ、東雲しのめの地にいる鬼は元々人間だった者たちです」

「人間だった…？」

「鬼は人の心が生み出したもの。主に怒りや悲しみ、欲望など闇の思いが人の心にまとわりつき、その闇が強くなり過ぎて人ではあらざる力を得てしまったと言ったほうが良いでしょう。鬼は暴走すると人を喰い殺します。遙か昔、その鬼が増えてしまったのです。当時の人々は鬼に怯え、村や街から追い出しました。住む場所の無い心の闇を抱えた鬼たちは、村から離れた山奥や森に住むようになりました。心の闇とは恐ろしいものです。その人あらざる力は鬼を人の何倍も生かせます。そして、鬼たちの間に産まれた稚児も既に鬼。私たちが戦っているのはその鬼なのです」

「……………」

「異世界からやって来られたあなたには鬼という存在が信じられないと思いますが、言った通り、鬼は人を喰い殺します。それを防ぐためにも戦っているのが私たち、鬼討士なのです」

老人の一人が続けた。

「私が若い頃までは良かったのですが、今は私たちでも倒すこと出来ぬ鬼が現れました」

座敷の上にひとつの絵巻が広げられた。読めないけど達筆な字が書いてあって、その横に星の形が書かれていた。どこかで見たことのあるような気がする。

皺だらけの骨ばった指が星の一角を指した。

「木は燃えて火を生む」

線をたどって繋がった角を指す。

「ものが燃えれば灰となり、灰は土に還る」

また繋がる一角を指す。

「金属や鉱物はほとんど土の中にあり、土を掘って得られる」
指が動く。

「金属の表面には凝結し、水が生まれ、」
指が最初の角に戻った。

「水が無ければ木は枯れてしまう」
どこかで聞いた覚えがある。

「今のは五行の相生です。私たちも鬼たちもこれを基に術を使っております。それぞれには生まれながらの長けた行があります故、それをどう駆使するかで勝敗が決まるのです」

「あの、私、」

「姫神子様は土行。十干では己つごです。姫神子はそう決まっていますから」

伏水が言った。

「そうじゃなくて、私、戦うんですか？鬼たちと」
その場が静まりかえった。

「それに私のこと姫神子姫神子って、何なんですか？」

老人たちが互いに目を合わせる。自然と視線が阿來のほうに集まった。

「……阿來、お連れする際、このことをお伝えしていなかったですね」

静かに伏水さんの声が響いた。阿來は下を向いて体を震わせている。伏水さんはため息をついた。

「失礼いたしました。言った通り、あなた様をここへお連れしたのは私たちでは倒すことの困難な鬼が現れたからです。姫神子とは鬼討士で最も鬼を倒すのに優れた力を持つ者をそう呼んでおります」

「でも、私にはそんな力、無いよ」

「いえ、あります。いくら未熟な阿來でもこればかりは間違えません。今はまだ目覚めていないだけです」

「そんな……」

「今すぐ戦えと言っているわけではありません。村の者たちを守るためにも、どうか力を貸して欲しいのです」

「……………」

私は何も言えなかった。ここにいる皆がそういう期待の目を向けてくるのだから。

どうしよう……。

「伏水、阿來、長老殿、そう姫様にすぎるではありません」

凜とした声がした。部屋に裾を引きずる音が響く。その人は綺麗な女性だった。迷うことなく私の前に座ると丁寧に挨拶をした。

「お待ちしておりました。私は芙蓉ふようと申します。姫様に及びませんが同じ鬼討士です」

伏水さんが咳払いをした。

「姫神子様、この芙蓉は元はあなたと同じ世界にいた者です。これからあなたの身の回りは芙蓉がいたしますので、困ったことがあれば芙蓉に言ってください」

「身の回りくらいできます」

「しかし、着物の着付けは大変なのでは？」

……言い返せない。

「伏水、姫様に無礼だぞ」

芙蓉さんの言葉に伏せ水さんは引き下がった。

「長老殿も、姫様は来られたばかりだ。本人が一番混乱されているのにあれこれとお願いするのは不躰もほどがある」

芙蓉さんはぴしゃりと言いつつ。老人たちがひるむ。そんなことは気にも止めず、芙蓉さんは「姫様、いきましよう」と私を連れて部屋をあとにした。

三 五行と十干

闇。

またあの夢…

真つ赤な紅い紅い朧月…

「目覚められましたか」

「……芙蓉さん」

名前を呼ぶと彼女はほつと息をついた。

「覚えてますか？部屋を出ていかれてあなたの部屋にお連れしている途中、倒られたんですよ。申し訳ありません。考えればあの森におられたのですからお疲れでしたのに」

そうか。私は寝ちゃってたんだ。そして、あの出来事は…

「夢じゃなかったんだ」

なんだか呆気ない気がした。

「夢だったら、……良かったですか？」

ただ、頷いた。

「そうですか」

芙蓉さんは切なそうな顔をしていたような気がする。でも、ごめんなさい。気を使うつもりは何故か無かった。

「私、どのくらい寝てたんですか？」

「昨日の夕方からです。今は朝ですよ。先に朝餉にして、後で体を拭きましようね」

「鬼…」

「姫様？」

気付かずに芙蓉さんの袖を引つ張っていた。

「鬼の、話をして」

何でそう言ったのかわからない。でも、どうしても気になって仕方なかった。

「…わかりました。でも、それは先に朝餉をとってからにしましよ
う」

芙蓉さんは困惑したようだった。

朝食は意外にも豪華だった。

「す…、すこい」

朝食は皆でとるのが習慣みたいで、その部屋に入ると膳が綺麗に
二列で対面するように並んでいた。奥のほうではその二列をくっつ
けるように並べてあって、コの字型にしてあると言ったらわかりや
すいと思う。

「紫苑ー、ここじゃここじゃ、おぬしの席、とっておいたぞ」

阿來が昨日の泣き腫らした顔はどこへ行ったのかと思うくらい
笑顔で手を振ってきた。

「阿來、静かにしなさい」

伏水は阿來の隣に座っている。

「芙蓉さん、」

「はい？」

「阿來のとつてる席ってどう見ても…」

「上座ですね」

私はひっくり返りそうになった。膳の数はざっと五十はあるのに、
何で私とその二列の間の席、しかもど真ん中の席なんだろう。

「阿來がとらなくても、皆とらないよ」

「そうですね」

芙蓉さんは苦笑していた。

席に着くと、横にちまつと正座している阿來が満足そうに笑っ
てきた。そんな顔をされたら、こっするしかない。

「うおう！？離せ離さんかっ…くっ苦し…」

「阿來が悪いんだよ、そんなかわいい顔してきたらこれをする以外
何があるの！」

「やつ……や、め……ろお……ほっ骨が折れ……」

抱き絞めてしまうのは女の子の本能だ。

「……………」

「……………姫様？」

伏水さんと芙蓉さんは絶句していた。

「美味しかったあ、あの魚のお吸い物美味しかったなあ」

「それは良かったです。料理担当の者に直接言ってくださると大変喜ばれますよ」

「そうなんですか、どこに行ったら会えます？」

「食事の時はこの屋敷にいる者、全てが一緒ですから下手のほうの席にいると思います」

朝餉のあと、体を拭いてもらって私に用意された部屋で私は芙蓉さんと話をしていた。

鬼の話をしてと言った私のために、いくつか絵巻物を持ってきてくれた。

「まず鬼について簡単に言えば、闇に心、魂を吞まれた者でしょう。闇に吞まれてしまえばその闇の負の気から謎の力を呼び集めてしまいます。その力を扱える者こそが危険です。闇に吞まれれば吞まれるほどその力は強くなります。私たちが倒せない鬼は闇の深い所にいる者たちなのです」

「そのために私が呼ばれたんですね」

「ええ」

芙蓉さんはひとつ、絵巻を広げた。そこには人が鬼へと変貌する滑稽な絵が描いてあった。

「昔、今もですが鬼は人が闇に捕われれば生まれます。その理由は様々ですが負の感情が暴走した結果とも言えるでしょう。そして、鬼と鬼の間に生まれた子どもは生まれながらの鬼です。言いかえれば、闇と闇の間には闇しか生まれれないということ。今いるほとんど

の鬼はこの鬼と鬼との子どもです」

昨日、伏水さんたちに言われたよりも自然と理解出来る。

芙蓉さんは絵巻を転がして見える絵をずらした。

「これが鬼の一番の問題です」

相変わらずの滑稽な絵だったけど、息が止まった。

「鬼は時に暴走します。暴走すると人間を食べてしまうのです」

絵は目を剥いた鬼が人間を頭から貪っているものだった。周りには手足など肉片が散らばっている。

「喉が渴くようなペースでの欲求ではないそうですが、こればかりは妨げないといけません」

「ペース？」

そして思い出した。芙蓉さんは元いた世界が一緒だったことを。

「どうか、されました？」

「いえ、そういえば芙蓉さんも同じ世界の人だったんだあって」

芙蓉さんは微笑んだ。

「あなた様より少し昔になりますが、私で良ければ向こうの世界の話に付き合えますよ」

「はい、じゃあよろしくお願いします」

「では、次に五行について説明しますね」

別の巻物が広がった。

「鬼討士も鬼も戦うときは、この五行を基本にしています。この星が表す、木、火、土、金、水。この五行を陰陽に分けたのが十干、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸。皆、それぞれ生まれながらの五行と十干があります」

「私は土の己だって言われました」

「姫神子の座に着く者は皆そうなのです。私や阿來などは術を鍛練して知るものですが。私は水の壬みずのえですよ」

「阿來や伏水さんは？」

この際、知っておいたほうがいいかもしれない。

「阿來は火の丁ひのこ、伏水は木の甲きのえです。五行はそれぞれの性質を分け、

十干で種類を分けたと考えたらいいでしょう。基本は五行ですが、時に十干の質を使いますので相手の十干を知るのは重要なことです」「あの、十干の種類って?」

「そうですね…、例えば五行の土行、土はこの世界の母体です。土は十干で戊つちのえ、己に別れます。戊は土でも聳える山を表し、己は稲穂を実らせる田んぼや畑の土を指すのです。他の五行もそのようになっています」

「基本は一緒でも山と田んぼじゃ全然違いますよね」

「ええ、だから相手を知るのは重要なことなのです。五行には相生そせい、相剋そく、比和ひわ、相侮そぶなどありますから、詳しくはこと巻物に書いてあります」

手渡された巻物は意外にずっしりとしていた。

「あと、木行だけなのですが、木行は木や植物だけではなく、風や雷など大気のを扱えます。けれど、雨は水行の協力がないとできないみたいです」

「ありがとうございます」

「いえ、礼におよびません」

優しく微笑む芙蓉に、碧い影が重なった。

「……芙蓉さん」

「はい? 为什么呢?」

「あなたたちが倒せない鬼ってどんな鬼なんですか?」

「……………」

微笑みが瞬時に消えた。芙蓉さんは台から和紙と墨を出し、筆をとると達筆な字で書き始めた。

「私たちが勝てない鬼というのは五人います。どの十干かはわかっていませんが、五行、それぞれに当てはまっています。そして、力が強すぎるあまり、その力の色が髪と瞳に表れているのですぐわかるでしょう」

白紙に、墨が染みた。

「まず、木行の鬼、香りを纏うと書いて、名は香纏かうてん。これは女の鬼

です。髪は翠色。木行の大气の力をよく使うので、一番十干がわかりやすい五行の鬼なのですがわかっていません」

次に、土と書かれる。

「土行は巽たつみに笠かさと書き、巽そんじゆう笠。髪は肥えた土の色です。一番目立たない色ですが、この鬼は片目の色が違う、オッドアイなのでわかると思います」

筆はなめらかに走る。

「金行の鬼、旺璃あつりし至。髪は金色で鬼の中ではちょっと違う雰囲気纏まとっていますから、言わずともわかります」

何だろう、この断定出来る自信は。そんなに変わっているのかな。

「次は……、」

腕が止まった。

「芙蓉さん？」

「あ、いえ、何でも無いです」

紙に文字が滲しみんだ。

「水行の鬼、深い蓮と書いて深蓮しんれんという名です。水のような碧い髪と深い水底の碧の瞳をしていますから、すぐにわかるでしょう」

もしかしたら、あの人かもしれない。そう思ったけど、私のことは言っではいけない、という言葉が脳裏に響いた。

「最後に、これがこの鬼たちの中で最も強い、頭格の鬼だそうです。名はクロウと言います」

そう言えば、あの人もその名前を言っていたような…。

「火行の鬼です。髪と瞳は燃え盛る炎の紅色。地獄の業火のように灰をも燃やし尽くせる鬼です。確定はしていませんが、十干は丁と皆考えています。丙ひのえは天の火、太陽を指し、丁は地の火、釜戸や鍛冶屋で燃える炎を指していますから」

筆が動いた。

「名前の感じはよく覚えています」

和紙に記された名に体が凍りついた。震える唇から言葉が漏れる。「くれないの、おぼろ…」

「炎の力を持つ者によく似合っていると思いますよ
べにおぼろ。と書いてクロウと読む。
最強の鬼、紅朧。」

三 五行と十干（後書き）

二話で説明がバラバラだったので、三話で芙蓉さんにまとめていただきました。

ほぼ説明で終わりましたね（^^）；

芙蓉さんは私としてもかなりのお気に入りキャラです。

メールで投稿していたんですが、ケータイの機能から改行やスペースが消えたりしているみたいで編集での調整がめんどくさいです。一応、チエックはしていますが、投稿してしまつたものはもう修正するつもりはありません。誤字脱字激しいかもしれませんが、よろしく願います。

次の話から新しいキャラが出てきます。鬼たちも出していきますので、頑張らないといけません；

もとは恋愛シュミレーションゲーム的な設定で考えていましたwその後遺症（？）からか、男性キャラの設定にかなりこだわってしまい、最終的に頭の色がおかしくなりました。でも、もういいよ。だって、鬼だから

実際、作者の頭はこんな感じです。

感想などはもらえると大変嬉しいですが、十話くらいまで読んでからいただけたほうがストーリー上、助かります。

あ、紅隴は長編小説に入るかもしれませぬ。

これから、各キャラを立てていくので、紅隴が完結できるまで、よろしく願います。

四 始まりへの始まり

琵琶の音が響く。水面に静かに輪が広がった。

「……花よ、散るがいい……」

震え響く弦に合わせ、呟くように唄を紡ぐ。

「…花と咲いた、儂き一生を…恨みながら……」

弦を弾く。その響きが木々の間にこだました。静まりかえると、琵琶を置いて青い草の上に寝そべった。

やっぱり、ここがいい。

深い森の中にぼつんとある、澄んだ水を湛えた池。空から注がれる陽光に煌めく水面はこの世界の数少ない、純粹に美しいもの。

このまま、何も考えず、何も思わず、何も感じずにいたい。

そう思う度、邪魔が入る。

「何か用か？」

目を向けることなく言った。…そいつは鼻で笑って木々の間から出てきた。

「さすがは、最強の鬼。気配を殺していても気付かれる」

無視をする。無視して腹をたてるような奴じゃない。

「一昨日からえらく機嫌悪いじゃないか。そんなに人間が嫌いかい？ 紅隴」

「……………」

そいつは断りも無く、傍に座りやがった。早くどっかに行つて欲しい。

「ま、どっちにしろ、敵でしかないからね」

風が吹いた。若葉を巻き上げ何処かへ散らしていく。

「用が無いなら帰れ」

「そうキリキリするなよ。胃に穴が空くぞ」

「……………」

馬鹿馬鹿しい。

「おとといの夜か、騒動があつたのは」

「……………」

そいつは続けた。

「たしか、数人の鬼が南方の村を襲つたんだつたな。それで鬼討士に狩られたつて。きれいな夜桜で花見をしたのに最悪だな」

「……………その尻拭いはじじいたちに任せている」

「押し付けたんじゃないか？」

「……………」

言いかえればそうだ。

「いいんじゃないか？たしか、あの時は深蓮が和解に入ったんだろ。いくらこつちが悪くても、あの時の鬼討士たちは深蓮に勝てないからな」

……………あの時？

「襲つた鬼たちも我慢出来ないものかね、餓えは俺たちより軽くせに。あいつらは深蓮がわざわざ自ら始末したらしいな、お前の屋敷で」

「…おい、あの時つて何だ？」

起き上がつてそいつの肩を掴んだ。そいつは目を丸くした。

「あの時つて、…おとといの夜のことだろ」

「そうじゃない、あの時の鬼討士たちつてことだ！」

そいつの金色の瞳に映つた自分の瞳が燃えはじめていたことに気づき、掴んだ手の力を抜いた。

「つ…悪い……………」

掴んでいた着物に穴が空いていた。爪で傷つけてしまった。

「いや、大丈夫だ。着物は替えがある。しかし、やっぱりお前も聞いていなかったか…」

「何を」

それまで冗談半分な物言いの顔から、瞳の色が変わった。射ぬくような金色に。次に言われた言葉に頭が白くなった。

「姫神子が現れたそうだ」

「……………」

姫神子。

「紅隴、焦るな。まだどんな力量があるかわかっていないから何とも言えない。けど、お前は強い鬼だ。だから、気にしなくても大丈夫だ。俺たちでいざという時は、」

「やめろ」

言葉を遮った。瞳の炎は落ち着いたものの、まだその奥でくすぶっている。鼓動が早まり、そのくすぶりをたぎらそうとしている。

「興味が出た」

「紅隴っ」

立ち上がり、琵琶を置いたまま黒塀の屋敷へ足を進めた。

「旺璃至、今晚は一騒ぎするぞ」

その紅い瞳を見て、金行の鬼、旺璃至は唇を噛み締めた。

「紅隴…」

「お前では俺に勝てない」

その姿を俺は嘲笑った。

俺の中には鬼がいる。

どうしようもない、醜い鬼が。

おとといからずっと、はらわたの底が焼けるような痛みが体中にしていた。機嫌の悪さは最も、そこにあったかもしれない。

姫神子の存在がもしもこの不快さに関わっているのなら、この目でその姫神子の姿を見ておくべきだ。

この最強の鬼、紅隴に楯突こうとする女の姿を ……この、紅い瞳に。

そして植え付けてやろう。この鬼の姿を、そのか弱き瞳に。

「紅隴…」

達筆で書かれた名前に体が膠着した。
真つ暗な夢に現れる、恐ろしいもの。

「……姫様？」

芙蓉さんの声に現実に戻された。

「いえ、な、何でも無いです」

しまった。明らかに動揺してるのばれちゃってる。

「……私で良ければ、聴きますが」

芙蓉さんはきれいな顔を歪めて心配をしてきた。それがもう、申し訳なくて苦しかった。

「大丈夫です、困ったときに言うかもしれないですけど」

「お辛いのなら、早く申されてくださいね」

「はい」

「……？」

返事をした後、何か違和感を感じた。さっきも感じたようなもの、
碧い……、

「芙蓉さん、」

「何でしょう」

どうしてこの人はあの人と重なるんだろう。

「その、深蓮っていう鬼について話してくれませんか？」

何故かその時、視線は芙蓉さんの顔では無く、彼女の目についていた。ほんの一瞬だけ、瞳が震えた。

「どうして、この鬼なのですか？」

「だって、どうしてもあの人と芙蓉さんがかぶっ……！！」

私は口を押さえた。あの人は、『私のことは言っではいけない』
と言っていたのに。

しまったっ！もしかしたら変なことをされるのかな？あの落ちてきた死体みたいに。この人たちは鬼をこんなに嫌っているから……。

頭の中でぐるぐると思考があちこちにめぐる。

どうしよう、ここはごまかすしか、

「あのっ、私っ……」

「やはり、あの鬼に会われたのですね」

私の混乱に、芙蓉さんの静かな言葉は恐怖でしかなかった。

「あっ、あの…」

言っていないくてごめんなさい。と言うより早く芙蓉さんが口を開いた。

「あの森から無事にいらしたということは何となく思っていたのです。あなたが鬼に助けられたんではないかと」

おもいきり凶星を突かれて私は何て言えばいいのかわからなかった。

「姫様がこちらの世界にいらした時、姫様はもちろん、鬼の存在は知りませんでしたから。そして、鬼は警戒や敵意を見せない者に無闇に牙を向けてくることはありません。だから尚更そうではないかと」

芙蓉さんは優しく微笑んだ。

「そう気を使われなくても大丈夫ですよ。私もこちらの世界に来たとき、森に落ちてしまったんです。その時の術士は伏水でしたが」

伏水さんも阿来と同じミスしてたんだ。あの泣き腫らした顔を出すと、怒りすぎなのかもしれない。

「そこで私は碧い髪の鬼に助けてもらったんです」

「そうだったんだ…」

同じ人がいて本当によかった。でも、芙蓉さん、一人で辛かったらうつつて思った。急に連れて来られて。

でも、一方で気持ちが悪くなった。

『……君も困ったものだ』

あの人が最初に私に言った言葉は私一人じゃなかった。なんで気付かなかったんだろう。

「その鬼が、水行の鬼、深蓮だと知ったのは後ですけど」

「……優しい人だったけど、鬼なんですね」

そう言って確認したかったんだ。ほんとは、認めたくないから。

「ええ」

芙蓉さんはきつぱりと、そう切り返した。
すごく悲しかった。

あんなに優しい人だったのに、鬼というだけで全て否定されるんだ。たしかに、人を食べるのは怖いけど、あの人は私にそんなことはしなかった。それでも、あの人は鬼だから
：
「姫様、」

芙蓉さんが頭を撫でてきた。

「私も最初はそう思いました。しかし、目の前で人が喰われて、それが自分の力の足りなさだと知ったとき、私には人を守りたいと……。そう思えば、戦うしか道はありませんでした」

「……芙蓉さんは、鬼が嫌いなんですか？」
撫でていた手が止まった。

「鬼は敵です。しかし、心優しい鬼にがいることは事実です」

私は何も言えなかった。その芙蓉さんの黒い瞳の奥に、芙蓉さんの苦しみが少しだけ、見えていたからかもしれない。

墨が乾いたのを見ないで芙蓉さんは紙を丸めた。白い肌に黒の斑がへばりつく。

「この紙は後で火にかけて燃やしておきます。この世界で名は呪です。相手を痛めることも呼び寄せることもできるのは姫様のいらっしやった世界でもありましたでしょう」

それは何となくわかる。

芙蓉さんは筆や道具を片付けはじめた。細く白い肌だからうらやましい。指も爪もきれいだ。

だから、目立っていた。袖口から見える、わずかに赤い跡に。

「その傷、どうしたんですか？」

「傷……ですか？」

「その腕の傷です」

気付かない芙蓉さんのために袖を手繰ってあげた。腕に一筋、赤い切尖が走っている。

「ほとんど癒えていますから、気付かれないと思っていました。こ

れは姫様がいらつしやる前の夜に負ったものです」

「大丈夫ですか？」

芙蓉さんは頷いた。

「南の村に鬼が襲い、伏水と草兼くさかね、そして私で倒しに行った際、負ってしまいました。草兼とは同じ鬼討士の者です。姫様と年が近いから、話しやすいと思いますよ」

じゃあ、十七くらいか。阿來も鬼討士だから、同い年の人がいるのは当たり前だね。

「……………阿來も、数え年で十七ですよ」

「え？」

表情を読み取るのが得意らしい芙蓉さんは、今、何で、言った？

「阿來も十七歳ですよ」

「……………、あの、阿來、が？」

「数え年ですが」

「……………え？」

あの可愛くて髪がふわふわしていて目が丸くて一メートルも身長
の無い、阿來が？

「えっ、それ、は、ど…、どういう、」

「紫苑ー！」

部屋の襖がスパーンと勢いよく開いた。

「噂をすれば……………」

「ん？何か言ったか芙蓉」

「いえ、それより阿來、襖はそうやって開くものじゃないと何度言
えばわかるの」

「ふん、じゃ」

そつぽを向く姿は同じ十七歳って思えない。嘘じゃないのかなと
思うけど、芙蓉さんがそんな嘘をつく人とは考えられない。

芙蓉さんは額に手を当ててため息をついた。

「で、姫様に何用だ」

「うむ、紫苑よ」

あの自信満々の姿で指を指してくる。

「だっ!?!」

しかし、その姿はすぐに崩された。頭を押さえてうずくまっていた。
る。

「うづうつ…、何するのだ!!芙蓉っ!!」

芙蓉さんは冷静だった。手を払いながら、

「姫様に指などを指した不届き者に罰を与えたまで」

「なんじゃとお!?!」

憤慨する阿來をなだめて改めて用事をきいた。

「おお、そうじゃった。わしは今から修行に行くのじゃ」

「修行?」

「そうじゃ。修行は術を駆使し、極めるのが主流だが、その基本として五行の力を高めることが必要じゃ。その修行を今からしに行くのだが、紫苑、わしと行かぬか?」

私は反射的に芙蓉さんを見ていた。

「私は良いと思いますよ」

芙蓉さんは微笑んでくれた。阿來に向き直る。

「うん、行ってみるよ」

まだ、鬼と戦つかどうかは決めていないけど、身を守るためにはしておいたほうがいいかもしれぬ。

「そうか!ならば最初は土行の修行をするかの!」

この際、年齢なんて関係ない。阿來のひまわりのような笑顔に、私は抱きつかずにはいられなかった。

その屋敷は森の奥、山肌にぽつかりと空いた場所に建っていた。

山肌と言うよりは、濡れた黒い岩肌で、静かに集まった雫が滴る。

その雫たちは、山上から流れてくる澄んだ水に混じっていく。

屋敷の薄暗い廊下にぎしりぎしりと木の軋む音が響く。静まり返っているのが尚更その音を響き渡らせた。

その音源の足音はある部屋の前で立ち止まった。
「入るぞ」

返事も待たず、襖が開かれ中に入った。部屋は廊下より暗く、襖や窓のわずかな隙間から光が差ししているだけらしい。

襖を大きく開き光を部屋に通す。やっと、この屋敷の主の姿が見えた。

「相変わらず湿気ってんな、この屋敷は」

屋敷の主にはその者の金の髪が逆光で輝いて見えた。

「……ここは元からそういう場所だ」

静かに返された返事に、旺璃至は肩をすくめた。

「そのうち黴屋敷になるぞ」

「心配する必要は無いよ。それくらい、私は手入れしているから」

「せめて襖を開けるよ。真っ昼間なのにここはいつでも夜みたいじゃないか」

「……………そうか？」

やっぱり自覚してないのか。

主の天然さはよく知っているし、長い付き合いだが、つくづく呆れさせてくれる。

「何だ。来たのは屋敷の愚痴を言うためだけか？」

「いや、ちよつとお前に頼みがあつてさ」

「紅隴が暴走したのか」

旺璃至は鼻で笑った。

「まあ、そんなとこだな」

主はため息をついた。

「お前はまともな頼みごとが出来ないのか。紅隴のことと女のこと以外に」

「まあまあまあ、そう言わず。俺が言わなくても肉親だから、大体察しはついているだろう」

主は無言だった。

「俺たちの中で紅隴を抑えられるのはお前だけだ。俺じゃあ勝ち目は

無いからな」

「そんなことは無いだろう」

笑い声が虚しく響いた。

「俺が死を覚悟して戦っても、相討ちに持っていければそれは奇跡だな」

「……………」

「だから、お前しかいない。今晚、紅隴についていってくれ」

「言われずとも、それは私の役目だ」

「ああ。頼りになるよ。あと……」

碧い瞳が旺璃至を見つめた。

「姫神子が来るならあの娘も来るはずだ」

「黙れ」

即座に出た言葉に旺璃至が面白がった。

「本当に優しい優しい鬼だねえ。俺には我慢出来ないなあ。感心するよ」

「皮肉だな」

「いや、誉めてるんだよ。だから、俺は強くなれない」

先ほどの笑みは違うものになっていた。それはの主にも、逆光であつてもわかつていた。

「俺はお前が羨ましくて仕方ないよ」

碧い瞳を、屋敷の主……深蓮はすがめた。

五 呼び出し

「まずは土行からじゃ！」

……という阿來の可愛い笑顔に連れてこられたのは…。

「へ…？」

「何をぼうつとしておる！」

「しゅ、修行、なんだよね」

「そーじゃ！それ以外に何がある！」

「だってここ、畑だよ？」

屋敷から少し離れた村の一角に私は着替えさせられて立っていた。周りを見ると、村の人が各自の畑や田んぼを耕している。

「わしらが普段食っておる米や野菜は五行の恵み、特に木行、土行、水行の恵みじゃ。その恵みの元となる畑はわしらと土行とでは近い間柄。だから、畑を耕すのは土行の力を上げるのに初歩的な段階なんじゃ。ほら、早く鋤くわを持って。今は春だから種まきや芽生えの季節じゃ。良い野菜が取れるよう念じながら耕すのだぞ」

渡された鋤は土埃に汚れていて、意外にも重たかった。

「ほれ、もつと力を使わぬと！」

「だって重たいんだもの」

「文句を言うでなーい！土へ恵みの感謝を込めて肥やさなければならんだぞ。ほれ、ミミズじゃ」

「ひゃあっ」

差し出された手のひらにはうねうねと動くアレが…っ！

「やだっ、阿來、ちよつとどこかにやってよ！」

「ひどいのう！ミミズのおかげで栄養のある野菜が食べれてるんじや、侮辱するでない！ちよつとは感謝するのだ！」

そう言われても、あのうねうねとしたかんじが…っ絶対ムリッ！！

「ほれっ」

「キヤーツー！！」

「阿來、こらっ」

芙蓉さんの怒声が響いた。芙蓉さんは着替えず、畑の傍の道で様子を見ている。

「ミミズに感謝するのなら、早く土に返してあげなさい」

「ごもつともな意見に阿來は渋々従った。ミミズはにゆるにゆると見事に土を掘っていなくなる。

ほっと息をつくくと、腹をくくって畑を耕しはじめた。表面が乾いた土に鍬を噛ませ、掘り出すように引くと湿気った色の濃い土が顔を出す。小さな虫が慌てたよう逃げた。

「姫様、お疲れになりましたら言ってくださいね」

「はい」

ほんの少しの時間だったけれど、体力はすぐに尽きた。

「お疲れ様です。水をどうぞ」

芙蓉さんが水と手拭いを持ってきてくれていたみたい。

「ありがとうございます」

受け取り、体に水が流れていく。体温が下がって落ち着いてきた。

「なんじゃ。もう力尽きたのか」

一方の阿來は身長と同じ大きさの鍬を軽々と振るい耕していた。

「阿來、すごいね」

「慣れておるからのう」

阿來は鼻の下を掻いた。ちよび髭のように泥がついてしまっている。

「あははっ、阿來、可愛い！」

「ん？何故じゃ」

芙蓉さんも笑っている。

「阿來、畑作業は終わったのでしよう、ならば姫様と川に行つて土を落とすなさい。ついでに水行の力を高めれるわ」

「そうじゃな、紫苑、行くぞ」

……と言つて、阿來は手を引いて走りだした。そして、水鏡に映つた顔を見て、笑われたことに怒つたのは、言わなくてもわかるよ

ね。

「おかえりなさい。阿來がご迷惑をおかけしませんでしたか？」

屋敷に戻って来たとき、伏水さんにまず、そう言われた。

「開口一番になんじゃ、それは」

ぷりぷりと怒る姿さえ可愛い阿來は、もはや犯罪レベルの可愛さだと思う。

「昼食はとられましたか？」

代わりに芙蓉さんが答えた。

「姫様はまだ食べておられない。今から着替えるから、他の者たちを待たせている」

他の者たち。

そう聞いて思い出した。この屋敷では食事は皆でとるんだと。

「伏水さんたちは先に食べてていいですよ」

二人は目を開いて見てきた。

「…だ、だって、皆さんお腹空いているんでしょう」

「しかし、これは風習ですから…」

伏水さんに洩られた。

「でも、それじゃ私も着替えるのに急いじゃうし、皆さんに悪い気がします。だから、」

「悪い気など、気にしなくていいのですよ」

「伏水、」

芙蓉さんが切った。

「姫様のお気遣いだ。それを否定するのはいかなものかと思うが芙蓉さん…、すごい。」

もしかしたら、この屋敷は芙蓉さんが仕切っているのかもしれない。そう思ってしまうくらい、芙蓉さんの瞳は凜としていて、逆らえる人がいなかった。

伏水さんは苦虫を噛み潰したみたいな顔で渋々折れた。

「わかりました。先にとらせておきます」

「では、姫様、部屋へ着替えに参りましょう」
言われるがまま、私は連れていかれる。阿來も着替ええないといけないから途中までついてきた。

部屋に入って、芙蓉さんは教えてくれた。

「姫様、伏水は頭が固い者なので風習風習など言ってますが、姫様のやりやすいようにして良いのですからね」

「わかりました」

頭が固いというのは言われなくても薄々感じていた。

残された伏水はため息をついた。

芙蓉の言っている通り、頭が固いのは自覚しているが、風習や文化をあれこれねじ曲げられるのは気に入らないしついていけない。

紫苑の言われた通りに食事は先にとるが、不満が悶々とした食事は不味いだろう。

「まったく……」

「あの女が姫神子ってやつか」

背後から唐突に声がした。

「普通の女だな」

紫苑たちが向かったほうを見ながら、その者は大して興味もなさそうに呟いた。

「……帰ってたのか、草兼」

「ああ」

短い髪を掻き、気だるそうに体を伸ばす。

「南の村に新しく結界を結んだし」

「帰ってたならば姫神子に挨拶をすれば良かっただろう」

「馬鹿か。わかってることをきくな」

露骨なまで嫌悪する顔に伏水は肩をすくめた。

「いつまで意地を張ってるんだらうね。むしろ私には君のほうが」
「うっせえ」

それ以上聞きたくないと言わんばかりの応え方だった。伏水は何も言わず、自分の部屋へずかずかと帰る後ろ姿に呆れるしかなかった。

「どつちが子どもなんだか」

昼ご飯の時は朝と相変わらず元気だったのに、夜はえらくおとなしかった。

「あ…阿來？」

しょんぼりとしつぽの垂れ下がった小犬を見ているみたいで、声をかけられずにはいられなかった。

お箸は動いてるけど、あんまり美味しそうじゃない。沈んだ目が潤んでいるように見える。

「……………ん？なんじゃ」

「げ、元気ないね……」

阿來は、ただ、うん、と頷いた。どんよりした空気がいつそう沈んでいく。

「阿來、気持ちはわからないこともないが、食事の時にそんな顔をするものではない。姫様も伏水たちも心配してしまう」

芙蓉さんが優しく話しかけるけど、阿來の様子は良くなるようすはちっとも無い。

大勢の前で聞き出すのもあんまりだし、阿來の様子もあつたから食事の後、私の部屋で芙蓉さんにきいてみた。

「申し訳ありません。ご心配をおかけしました。しかし、明日になれば阿來は元気に戻っておりますから」

本当にいいのかな…。あの阿來が一気に落ち込んだんだもの。

芙蓉さんは沈んだ顔で続けた。

「お気持ちはわかりますが、私たちでもこれには何とも言えないのです」

「でも……」

私が言いかけた時だった。

「うっ……………！！」

体が強張った。膝がガクガク揺れ、体温が冷えていくのを感じた。動機がし、息が苦しくなる。

「姫様！？」

芙蓉さんの悲鳴が夜の帳を裂いた。

そして、皿が割れたような音が響く。

「まさかっ…結界がっ！？」

芙蓉さんは私の体を支え、目を見開く。木枠の窓を開き、星の瞬く黒い空に白い罅ひびが走っていることに気付いた。

「そんなっ」

「紫苑、紫苑ー！！」

阿來が血相を変えて部屋に走ってきた。

「大変じゃ、村に鬼が入りおった！！」

「わかってている！この結界は私と伏水が作ったものだ、並大抵の鬼じゃない！何者だ！？」

「わからぬ！！わしも知りたいわっ！！」

心臓が身体を中心でうねる。

どくり、どくりと。

身体を循めぐる血が渦巻いているような歪んだ気持ち悪さ。頭もぐらぐらして眩暈めまいがする。

『来い、姫神子』

眩暈する瞳を閉じればあの暗い場所。

深い深い闇の場所。

あの空、ここは……………

「…べに、おぼろ……………っ、紅朧が、来てる…っ」

息継ぎを繰り返しながらやっと言えた言葉に、二人共、目を大きく開いた。そして、納得したように芙蓉さんが口を開く。

「…なるほど、彼ならこの結界を破るのは容易いものでしたね」
皮肉の濃く滲んだ言葉だった。

「紫苑、大丈夫か…？」

阿來が可愛い顔を歪めて顔を覗いてくる。私は頷いた。

「姫様は屋敷におられてください。すでに鬼の気に当てられているのですから。屋敷はもう一つの結界に覆われています。出られてはお身体が危ないです」

「それじゃ、ダメです…っ、私が行かないと…」

そう、私を呼んでいた。だから、

「紅隴の目的は、私です」

六 声（前書き）

術などの漢字は（ ）が無い限り、音読みで読んでください。

六 声

闇に染まった大地を橙の灯りが照らしだした。そこに咲いた薄紅の花を踏み潰して行く。

膝ほどまで伸びた青い雑草を掻き分けそれらはやってきた。

その内の一人が前に出て、目の前に阻み立つ木と石で作られた門の扉に手をかける。ばちりと火花が散り拒絶した。手を離し、振り返ると中から一人の男が出てきた。

その男は無言で扉に手をかけた。もちろん、火花は爆発したように散り爆ぜたが、男は口端を吊り上げただけだった。

とたん、硝子が割れる音が響いた。そこから白い筋が走るように罅割れていく。

「この俺にこれだけの結界がかなうとでも？」

黒く染まった天に白い罅が昇る。

それが長い一夜の幕開けだった。

「紫苑、無理はするでないぞ！」

「うん、わかつてる」

私は阿來と芙蓉さんに支えられて鬼がいるという場所に走っていた。

先に伏水さんが向かっているらしいけど、直感で伏水さん一人の手には終えないと思った。それには芙蓉さんもわかつていたみたいで、だからこそ私たちは急いだ。ただ、私の体が上手く言うことをきいてくれない。

『紅隴の目的は、私です』

少し前に絞りだした答えに自分自身、驚いた。

だけど、あの世界に出てくる紅い隴月。呼び出した声はあの隴月から響いた。

でも、その中に、別の声も聞こえたんだ。何を言っているのかわからなかったけど、叫ぶような声が。

紅隴の目的は私だ。伏水さんが紅隴とどう戦っているのかわからないけど私が行かないといけな。

「紫苑、あそこじゃ！」

阿來の声に弾かれたように前を向いた。

「去れ！鬼ども！！来風槍っ！！」

伏水さんが怒鳴った。その手に握られていた紙みたいなものをつ。

「ぐあっ」「うっ」

それは空中で光り、鋒のような形になって鬼の集まりを貫いた。

一見、人と変わらない鬼が倒れていく。でも、集まりの一人がその術を手を一振りして霧散させた。

「っ……」

「術士でも、その程度か……」

声だけで誰かわかった。

あの人だ。森で助けてくれた深蓮という鬼。

齒噛む伏水さんが懐から一枚紙を抜き取り構える。

「退け、お前が出て無駄だ」

「黙れっ、村を襲う気なんだろうっ！」

伏水さんが吠えるのにあの人……深蓮……“さん”かな？深蓮さんは肩をすくめた。

「私からは何とも言えないのだが……」

「とぼけるな！！」

伏水さんの声に陰しさが増す。

「どうせお前らは人々を痛め付け、食い荒らしに来たんだろうっ！」
「……………」

深蓮さんは言い返さなかった。それが私の胸を刺した。

「去れ！葬風斬！」

伏水さんの手から疾風の攻撃が舞い上がって深蓮さんを襲った。

「…波水面」
なみななち

静かに呟いて深蓮さんが手をかざす。そこから円状の水面が広がり、伏水さんの攻撃がぶつかって爆発みたいな飛沫が散った。

「…くそっ」

「伏水、伏せろ！！」

渋る伏水さんに芙蓉さんが叫んだ。けれど、それは遅かった。

「うああっ！！」

「伏水さん！？」

「紫苑、気を付けろ！奴じゃ！」

阿來の言葉はその時、私の耳には聞こえていなかった。だって火事とかじゃないのに目の前で人の服が燃えたんだよ。違う、本当は火の玉が当たったんだ。

「阿來、姫様を頼んだ！」

芙蓉さんが血相を変えて伏水さんの所に走った。

「伏水は木行じゃ、木は相生で火種になってしまふ。だから水行の芙蓉が呪いまじなをせねば伏水が危ない」

「そんなんっ」

どこから火が…。

そう周りを見渡していると、あの人…じゃなくて深蓮さんに目がいった。

伏水さんを庇うように出てきた芙蓉さんに深蓮さんは一瞬、目を見開いた。

そして、その視線は芙蓉さんが走ってきた方、私たちに向かった。

「やはり…」

深蓮さんは眉をひそめて呟いたけど、私にはしっかり聞こえた。

「伏水、大丈夫か！？」

芙蓉さんの声に私も阿來も深蓮さんもそちらに気が向いた。だから気付かなかったんだ。背後にいた存在に。

伏水さんは答えた。

「ああ、…何とか、それより鬼を…」

「わかつている！」

芙蓉さんは険しい顔で伏水さんと一緒にいた鬼討士らしい女の子に任せた。

「うおっ！？」

「阿來！？」

気付いたら隣にいた阿來の体が軽々吹っ飛ばされていた。

「阿來っ」

「いだっ！！」

地面に叩きつけられた阿來のもとに行こうと、……したけど、体が動かない。

「え……？」

動かないんだけど、これって……

「こんな所に可愛らしいコがいるなんてね。俺は今晚、運が良いらしい」

耳元で囁かれた甘い声に私の体は硬直した。というか、私と阿來は背後の存在に全く気付かなかった。というか、それより……

「姫様を離せ！」

「し、紫苑！」

芙蓉さんと阿來が顔色を変えたのは仕方ないと思う。だって、私、後ろから抱き……っ、抱き、締め……っ！?!?!?

「やだね。こんなに可愛いコをこの俺が易々離すわけないじゃないか」

この場に合わないふざけた物言い、髪を撫でてきた。この間にこの人は芙蓉さんたちが邪魔しないよう人質みたいな振る舞いをしていたみたい。そして、私の顔を真上に向かせると、いたずらっ子のような笑みを見せた。

「君も俺から離れたくないでしょ？」

そんなこと言われて顔が赤くならないわけがない。

私の顔から頭一つほど上にあるその人の顔は本当にきれいだった。深蓮さんもきれいだけど、この人のきれいはちよっと違う。きれい

なんだけど、……こういうのも恥ずかしいけど、フェロモンとか言うのが出まくっている。すごく。

どうしていいのかわからなくて口をぱくぱくしてると、その人は面白そうに笑ってきた。

これって、どう考えても遊ばれているだけなんじゃ…。

そう考えたら少しは落ち着いてきた。

阿來を飛ばしたのって、この人だよな。なら伏水さんに火傷をさせたのはこの人？

そう一瞬、思ったけど、全く違うことに気付いた。

この人の髪は金色だった。そして、芙蓉さんの言っていたちよつと変わっているっていう金行の鬼…、

「旺璃至…」

零れた言葉にその旺璃至という鬼は一度、目を丸くした後、さつきとはちよつと違う微笑みを見せた。

「へえ、俺の名を知ってるんだ。嬉しいなあ、姫神子直々に名を呼んでもらえるなんて」

姫神子。

そう呼ばれて私は自分の立場を理解させられた。ここで呑気にしている場合じゃない。

「あの、離し…」

「姫神子と呼ぶのは寂しいから俺も君のことはあの童わらわと同じで紫苑と呼ぶよ。だから俺のことは旺璃至って呼び捨てで呼んでね」

言い終わると旺璃至は意外にすんなり腕を外してくれた。

「へ…？」

うるたえていると、芙蓉さんと阿來がすかさず私の所へ駆け寄った。芙蓉さんが謝ってくるけど耳には入ってこない。

「旺璃至は女を大事にする主義だ」

そんな様子を見かねて深蓮さんが口を開いた。

「…まあ、言い替えれば女たらしだが」

「やだなあ深蓮、人聞きの悪い」

深蓮さんは肩をすくめた。

そして、視界に入った姫神子たちに眉を寄せる。

「人とは欲深いものだ…」

呟いた言葉は誰にも聞こえないほどの声で紛れた。

「これが姫神子か」

「きゃっ……！」

叫ぶのは遅かった。身体に急に圧力が襲って身体の自由を奪われた。自分自身、どうなっているのかよくわかってない。

「うっ……」

喉には上がった吐き気を無理矢理押さえつけて私はその姿を見た。

芙蓉はその様子に顔を歪めた。 気配なんて無かったのに…！

「姫様！！」

芙蓉さんの悲鳴が聞こえた、そしてさっき阿來が地面に叩きつけられた音が響いた。でも、今の私には聞こえていて聞こえていない。どうしてだろう。頭がぼんやりする。視界もふちがぼやけてきてる。数少ないわかるものの中で唯一はつきりとわかるのは、掴み上げられた右腕。爪先は地面についてるけど、吊り下げられたような痛みを地味に感じる。

「普通の女だな」

上から下へしっかり見た後に言われたんだ。ひどい。

「おい、旺璃至、これが本当に姫神子か？」

「なんだか今更言うのも変だけど、姫神子って何？」

「ああ、そつだよ。でも、苦しそつだ。やめてくれ」

「何だ、人間を庇うのか？まあ、お前は女に甘いから、仕方ないか」
嘲るような笑い声が響いた。

脳裏にあの真つ暗な世界が蘇る。

あの世界はきつと繋がっているんだ。

そして、叫んでる。

嫌な笑い方をするんだね…。

「何だつて？」

よくわからなかったけど、私の目はうつすらとしか開いていなかったと思う。だから、怖気づかなかったのかもしれない。それに、意識もぼんやりしていたから自分がどうなってるのかよくわかっていなかった。

「嫌な笑い方をするんだね…」

「どういう意味だ」

深蓮は目の前に起きたことが信じられなかった。

姫神子と呼ばれる少女が伸ばした左手はその鬼の右頬に添えられる。

少女は自分の状態を理解出来ているのか出来ていないのかわからない。

けれど、少女は言った。

「あなたは誰？」

鬼は鼻で笑った。

「俺は鬼の頭、」

「違う、あなたは誰？」

「何を言ってるんだ」

訝しむ鬼の顔はある意味滑稽なものかもしれない。少女は続けた。

「何故泣いているの？」

「紅い瞳が開かれた。」

「あんな真つ暗な場所で」

七 闇に吞まれていくもの(前書き)

超倦怠期だった回になってしまいました。要するに、すごい悩んだ回です。

コロコロ変わっています(?)がよろしく願います・、

七 闇に吞まれていくもの

あの世界。

黒い夜空に浮かぶ紅い朧月。

高い草をかき分けて、体に痛みを感じながら走っていた。

あの朧月の方に。

頭の中でここにいてはいけない、いてはいけないと誰かが言うてる。

もちろん、怖いよ。言われなくてもわかる。

でも、あの時、朧月から声がした時、聞いちゃったんだ。

叫び声を。胸を裂くような痛い声を。

もしかしたら、この世界に私と同じで迷い込んでいる人がいるのかもかもしれない。こんな所じゃ、怯えて当たり前だから。

こんな所に一人なんて寂しい、私が寂しいって思ってるんだもん。寂しいし怖い。怖いけど、一人より二人のほうが私だって心強い。

手が触れる草が切り付ける痛みを与えてくる。それでも、行かないと。

「……………」

声が聞こえる。

「……………」

すすり泣く声。

覆い被さるように茂み立つ草の束を腕で押し退けた。

「！」

息を飲んだ。

どうしてこんな所に小さい子が…。

そこには草で傷つけたんだろう、全身傷だらけの幼い子どもがいた。震えて、この世界を拒絶するように身を縮めている。

「大丈夫？」

声をかけずにはいられなかった。

小さな体はびくつと動いた後、ゆっくりと頭を動かした。少し長めの黒髪でよく顔は見えない。

「怪我、大丈夫？」

「……ひっ」

伸ばした手にその子は後退った。

「だ……、だれ……っ!？」

体の震えで歯をもガタガタさせながらその子はきいてくる。

この子、本当に怖がってる……。

私はその子の目の高さに合わせて合うようにしゃがんだ。

「私は城東紫苑って言うの、君は？」

「キ、キトウ……？」

そう繰り返して、その子は私を真っ直ぐに見てきた。

「うん、城東、紫苑……」

そして私は気付いた。

黒髪から覗く、その子の瞳が紅いことに。

「え……？」

まさか……。

「キトウは……、鬼討士」

その子は口の中で言ってるようなこもった声で呟くと、急に耳を塞いだ。

「来るな!」

突然、その子は叫びだした。

「来るな!来るな!帰れ!」

「えっ?」

「僕を消しに来たんだろ!帰れ!」

「でも、」

「来るな!」

その子が叫んでいけばいくほど黒髪の色が紅へ変わっていく。

誰なのかわかった。

そして、何よりも気になって仕方なかったのは、紅い瞳に溜まっ

た涙。

「あっち行け！」

叫ぶ姿にひび割れた姿を見いだせたのかもしれない。ここを離れようとは思わなかった。

どこからともなく強い風が巻き上がる。草が騒めき、その子に覆い被さりだした。

「ひっ……」

その子は恐怖の声を上げて身を縮めた。その細い四肢に葉が傷つけだす。

「やめてー!!」

じつとなんてしてられなかった。

貼り付いたように重なった葉を無理やり引き剥がす。手に痛みが走っても、それを気にする余裕なんて全く無い。

剥がしても剥がしてもどんどん草はその上から被さってくる。やつと、その子の体が見えたときには、私の体も草の中に覆われていた。

「大丈夫!?!」

返事はない。

でも、体が震えている。

「大丈夫だから……っ」

貼りついた草ごと、私はその子を抱きしめた。

「大丈夫だからっ」

どうしてそんなことが言えたんだろう。こんな状態で何が出来るのかもわからないのに。

それでも、こんなことしか言えないけど、このままじゃ壊れていきそうで。

目の前で、崩れていくのを見守るだけなんてのは嫌だ。

「大丈夫だよ、」

そう思えば思うほど腕に力がこもっていく。

「大丈夫だから……!!」

その時、腕の中からぬくもりを感じた。熱いとか温度とかそういうものとは違うような温かさを。

「……なに？」

目を見開き、その子の様子を見ようとした私の視界は、急に真っ暗になった。

真っ暗な闇、この世界の黒よりもっと深い黒。そこに沈む紅い紅い……、月……違う、……あれは、日……？

「何だ、人間を庇うのか？まあ、お前は女に甘いから、仕方ないか」
そこから私の意識はここへ全て戻っていた。まだぼんやりとしているけど、右腕に不愉快な痛みを感じながら今までの半分の意識が確かなものになっていた。

「嫌な笑い方をするんだね……」

意識も薄ぼやけたような顔で女は言った。珍しい女だ。たいていの奴は、人間であれ鬼であれ脅え身動きひとつしないというのに。

「どういう意味だ？」

聞き返してみると意外にも、自由のきく手を伸ばして頬に触れてきた。

つくづく珍妙な女だ。そして、言いだした言葉に笑わせてくれた。

「あなたは誰？」

旺璃至の名は知っているのに俺の名は知らないのか。いいだろう、教えてやろう。

「俺は鬼の頭、」

「違う、あなたは誰？」

言いかけたのを遮られたが、女の言いたい意味がわからない。

「何を言ってるんだ」

訝しんで顔を見たが、女の表情は変わらなかった。

変わらなかったが、その表情は違った。薄ぼやけたものではない、しっかりとした凜としたもの。「何故泣いているの？あんな真つ暗な場所です」

……何を言われているのか理解するのはかなり遅かった。その言葉は胸を真つ直ぐに、的確に貫いていて、体の奥で何かが砕け散る音がした。

「何の、ことだ……」

やっと言えた言葉に、彼女は頬をそつと撫でてきた。

「あなたは、本当のあなたじゃないと思ったから」

「どうして……」

そう言うと、彼女は睨み付けることなく見つめてきた。右腕を持つたままだったから、痛いだろうに。

「勘みたいなものだからあんまりはつきりとは言えないけど、わかっているのは、あなたの十干は丁じゃない。天に昇る太陽の十干、丙なの」

「……」

「私は見たから、闇に吞まれていこうとする太陽を」

私は確信していた。

あの闇は鬼の闇ではないかと。

それは予想のひとつでしかなかったけど、確信出来たのは何よりも紅朧が流したひと筋の涙だ。

紅朧は気付いているのかな。周りからは頬を撫でたとしか見えていなかったみたいだけど、あれは涙を拭ってあげてたんだ。

この人は鬼という闇に吞まれようとしている。多分、この人は深蓮さんみたいに優しい人なんだ。闇に脅え、人に脅え、闇という鬼である自分にも脅えている。

だから、言っておけないと。生意気でも無知でもいい。

でも、目の前で、崩れていくのを見守るだけなんて嫌だ。

これだけは譲れない。私ができることを、出来る限りのことを…！

「太陽はね、闇に吞まれちゃいけないの、ブラックホールなんてのが宇宙にはあるみたいだけど、そんなのに吞み込まれたひたすら闇でしかないの！」

「…ぶ、…ぶらつく？」

後々よく考えたらブラックホールなんて、この人たちは知ったこつちやなかった。

「本当のあなたは太陽みたいに温かい人のはずだよ！そんな人が鬼なんて嫌だ！！」

何でこんなに叫べたのか。私にはよくわかっていなかった。

しかし、その叫びの意図を少なからず理解した者はいた。

「姫様…っ」

芙蓉は人質を取られ動けない自分を責めながら様子を見ていた。

ふと、近くに立つ深蓮に目をやる。

深蓮もわかっているだろうか。姫様がああ叫ぶのは深蓮の優しさを身をもって知っているからだ。それは自分自身にも言える。でも、私は違う。けれど、姫様の思いは痛いほどにわかる。

何故だろう、いや、いつからだろう。こんなに視界が潤んでしまふのは。むせ上がるようなこの思いは…。

紅隴はこの思いの叫びを聴いてしばらく黙った後、口を開いた。

「それでも、俺は鬼だ」

辛そうな瞳だった。わかってる。これくらい、わかってのことじゃないか。

「……鬼は、花には成れない」

「え……？」

不思議な言葉だった。何のこと？ときこつとしたけど、その目の前を何かが通つて出来なくなった。

「ぐっ……！」

紅隴のうめき声と同時に右腕に自由が返されて私はバランスを崩した。

倒れるっ！

「……っ」

そう身を固まらせたけど、地に打たれる痛みは来なかった。

「……？」

ゆっくり目を開くと私は誰かの腕の中にいた。紅隴の腕とは違う着物を纏った腕。

「様子がおかしいから来てみれば何だよこれは」

その人は片腕で私を支えて、もう片方の手で刀を紅隴に向けていた。

「くそ……っ」

紅隴は着物ごと斬りつけられた腕を押さえて睨み付けてきた。赤い血が滴り茶色い土に新しい模様を描きだす。

「何へたばつてんだよ、伏水、芙蓉」

トゲのあるもの言いだったけど、この言葉に私はこの人が敵か見方が理解した。

短い髪、そこにある顔つき、ほとんど同じ年齢に見える。

「草兼、くん？」

芙蓉さんが言っていた鬼討土の名前が浮かんできた。呼んでみると、彼は顔を紅隴に向けたまま横目で一瞬見て、無言で再度紅隴を見据える。

旺璃至が呟いた。

「草兼……、鬼討土の中でも優秀な金行の奴だったな」

七 闇に吞まれていくもの（後書き）

大変読みにくい回にしてしまいました。

きつと、きつと、次はもつと良く…良い回に…っ！

なんと、先ほどアクセス解析を見えますとユニークが1000人突破しております！

大変嬉しく、

お気に入り登録も5件いただき大変嬉しいです。

ありがとうございますm(____)m

嬉しさのあまり舞い踊ってしまいそうですwww

しかし、この件数を下げないためにも頑張って面白い内容にしないといけません。

がんばります。

ところで、作者は書いている作品の世界観をまとめるために、それぞれの作品のイメージに合う曲を聴いています。

この作品ではALIE PROJECTの「胡蝶夢心中」が主ですね。

この曲はこの作品のとあるキャラクターがイメージなのですが、このキャラクターがこの作品を書くに至った原点なのです。

他にもいくつかはありますが、聴いていただければ世界観に少しは近づいていただけるかと。某動画サイトで聴けると思いますよ。

この回でやっと、各キャラクターの詳細が完成したので後はうまく組み立てていくだけです。

ホント、集中力と文章力が欲しいです。

長くなってしまいましたか、

紅朧、これからも読んでいただけたら嬉しいです。

というか、ここままで読んでいただいております。――

――

2010/5/16 DAISY・RosEs

八 盡く思い（前書き）

わかっていらっしやる方はおわかりでしょうが、小説の更新はけっこう遅い方です。
本当にすみません；

八 盡く思い

何故、こんな大して秀でた点も無い女の顔に、こんなにも魅入られるのだろうか。

彼女の叫ぶ姿に、一瞬だけ、そう思った。一瞬だけだったのは彼女の叫ぶ内容が信じられなかったから。

これも姫神子の力なのだろうか。

けれど、姫神子に力があるならあの掴まれた腕くらい簡単に振りほどけたはずだ。ならば、彼女はまだ姫神子として覚醒していないのか。

……それよりも何故、こんなに腹の底が焼けるように熱いのだろうか。

少し前から感じていた不快な痛みがこんなにも強くなっている。今まで感じたことの無いほどの強い痛み。胸焼けしそうなほど湧き上がる不愉快さは。

この気持ちを何と言おう。

突然走った痛みにすっかり目を閉じた。

血の滴る腕を押さえ、目を開き、一番最初に見たのは、草兼という鬼討士の腕の中にいた姫神子の姿だった。

彼女はその男の腕で戸惑ったように視線をあちこちに巡らせている。

その視線がこちらに向き、裂けた傷に流れだす血を見て息を飲んだのがはっきりとわかった。

そして、彼女はその腕の中で男の名を口にした。

この、目の前で。

はらわたが燃えあがった。

それと同時に、瞳の奥の炎がまた、燻りだした。

暗い夜闇の下、無数の松明が橙色の灯りで照らす。地味にぱちぱちと鳴る小さな音が静まりかえったその場によく響いていた。

互いに向き合って立つ紅隴と草兼くんの距離は五メートルくらいある。けっこう近いけど、紅隴に捕まっていた私を解放させてくれたんだから、それなりの距離はあると思う。

草兼くんは紅隴に睨まれても動じることは無かった。けど、嫌な脂汗をかいていた。やっぱり最強の鬼って言われてる紅隴の、あの射ぬくような瞳から睨み付けられたら動揺しないわけがない。私だって、私を睨み付けてるわけじゃないのに体が震えてるんだから。

紅隴の凍りつきそうな殺気が増してくる。自然に、本能的に体が縮こまって震えが強くなってきた。

草兼くんの眉間の皺が深くなつて、片手に握る刀の柄を再度握り直す。

「焰大蛇……！」

肌を焼きそうな熱風が舞い上がった。紅隴の手から炎が空高く立ち上り、ゆらゆら揺れる曖昧な体を形取らせた。

「な、何あれ……」

反射的に体を強ばらせた。

紅隴の真上に蛇が浮いている。炎で出来た巨大な蛇が。

頭の部分から細長い舌をちろちろ覗かせ、長い体をつねらせる。動きが止まったかと思うと黄色の眼をこつちに見据えていた。

「おい、力を貸せ」

「え？」

震える私に草兼くんが急に、さっきよりも強く抱き寄せてきた。

「金行の俺があれを止めるのは難しいからな」

歯噛みし、その一振りの刀を地面に突き刺す。

「ちょ……、そんなこと言われても」

「つべこべ言うな、さっさとしないと村と一緒に燃えるぞ」

そんな…。

草兼くんの苛いらついた言い方におされたけど、まだ術なんて使えないしよくわからない。首だけで右往左往していると自然と目が紅朧に向いた。

「！」

そして気付いた。紅い瞳の色が戻りつつあるのに。

「ダメ…！」

指を差し、私の声を制すようにゆっくりと紅朧は口を動かした。

「喰え」

冷たい声音こわねが響いた。

主の命に巨大な蛇はその指の先、私たちに向かって炎の牙を剥きだす。

「鉋岩戸！」
あらかねのいわし

草兼くんがすかさず叫ぶ。刺さった刀を庇うように大きな岩が地面から突き出てきた。

「くそ…っ」

草兼くんは刀を地面に突き立てたまま柄から手を離して手で何かを結んだ。

「……………」

口元で何か呟いている。

何をしているのかきこうとする前に、目の前の岩から強い風がぶつかった音がした。

「くっ…！」

草兼くんが苦しそうに唸った。岩から変な音がして、形が溶けながら変化している。

「愚かな」

紅朧の瞳のくすぶりは、炎へと変わっていた。その口端が吊り上がる。

「金行など相剋そついくで勝ち目は無いだろうに」

蛇は岩に轟音を響かせてぶつかった後、一旦引き返して体勢を立

て直すなり再び草兼くんに向けて突撃した。

「耐えられるか…！」

草兼くんは手の形を変えると、また何かを紡ぐみたいに呟きだした。

岩の向こうでもわかる、蛇の燃えるあぎとに私は草兼くんにするしかなかった。

「霧曇きりくも！」

地面から白い何かが立ち上った。何があつたのか確認する前に、体を別の手が掴んで耳元で囁く。

「姫様、こちらに」

草兼くんの腕が解かれ、私はその声の主、芙蓉さんに引かれてどこかに移動させられた。走りながら、何故か紅隴との距離が離れていくのを妙だと感じていた。

芙蓉さん以外、真っ白でほとんど見えない。深い霧……。そっか、これは相手の目をくらますための術なんだ。

ふと、走りながら後ろを振り返る。

草兼くんは、大丈夫かな…。

真っ黒だった空を紛らすように漂う白い闇に紅隴は舌打ちした。

その側で、旺璃至が苦笑する。

「こりゃあ、木行か土行じゃないとな。俺たちで出来ないことも無いが……、晴れるまで、待つか？」

紅隴は答えず霧の向こうを睨み付けていた。この霧をどうにかしようとは思っていないらしい。

深い霧の中から炎の大蛇が頭を主の前に現す。

体が炎で出来ている大蛇にとっては最悪の環境だな。

そう考えていると大蛇は主に甘えて頭をすり寄せる。その頭を紅隴は優しく、普通の動物を愛でるように撫でてあげた。その手には火傷も焦げた跡も無い。

最強の鬼でも慈愛は無いわけじゃないのか。
そう自嘲した顔をして、あることに気付き、周りを見渡して呟く。
「……………で、深蓮の奴、どこ行った？」

草兼は大蛇の攻撃が止まったことを確認して地面から刀を抜いた。
一振りして刃についた土埃を払うと改めて辺りを見渡す。

真っ白な濃い霧。

「芙蓉の奴…………、術を放つのが遅いだろ」

ぶちぶちと文句を並べているが、実際、本人を前にすると言えない。

しかし、姫神子をここから引き離してくれたのは最善の行動で、
草兼からしてみれば重いお荷物が降りたものだった。

それに彼女がこんな所でへまをすることはほとんど無い。今回は
相手が相手で、彼女も彼女なりの理由があるのだろう。

だが、気を抜くことは許されない。今の状態で紅朧を倒すには力
が劣る者から言えば、ここで可能なことは鬼たちを全て追い出すこ
とだ。いつかは倒さなければならぬ時はくる。

さっきの距離から考えれば、この近くに紅朧がいることは確かだ。
…出来るだけ距離を離しておいたほうがいいかもな。

草兼は紅朧がいた方向から反対の方へ足を進める。気配からは紅
朧と離れていつてるのを感じるが、芙蓉の術は味方の視界をも悪く
するから玉に傷だ。

その濃い霧から突如、数体の黒い影を現した。

「ぐおおおつ」

それぞれが持つ得物を振り上げてくる。その手のどす黒く、いび
つに尖った爪が、鬼の餓えに完全に陥った鬼の何よりの証拠だ。得
物で自由を奪い、爪で喉笛を掻き切って人を貪るように喰いつくす。

「雷切らいきり」

刀身がきらり、こがねいろ黄金色に輝いた。

一瞬だった。

「……………」
全ての影の胴体に一筋の線が走った。

「……………」
「がつ!!」

土埃を散らし次々と鬼が倒れる。

「ふん……………」
襲う相手を間違えるなよ」

愛刀の「雷切」を振って血を飛ばしている間に、倒れた鬼たちは砂になり、穏やかな風に吹かれた。

「……………」

しゃがみ、その砂を手で掬い見つめる者がいた。

「……………」

急に現われたので驚きが言葉にもならない。

「……………」

その鬼は何も言わず、警戒する草兼を見つめた後、立ち上がるなり碧い目を伏せて霧に紛れた。

「何なんだ？」

草兼はその消えた先を睨み付ける。そしてあらためて気付いた。

「霧が、濃くなっていないか？」

芙蓉さんの足、早い。

息を切らしながらそう思わずにはいられなかった。

なんとかついていけるけど、本当は芙蓉さん、わざと遅く走ってる。だって、息を切らしそうな様子が無いし時々こっちの様子を見ってくるから。

「阿來、」

気付いたら、霧の中から阿來が現れた。

「紫苑！」

「大丈夫か？」

芙蓉さんの問いに阿來は大きく頷く。

「ああ、わしはここで雑鬼どもの相手をしておった」

「そう、今度こそ姫様を頼む」

「おう、わかった！」

阿來が私の手を取るなり、芙蓉さんは霧の中へと入った。多分、草兼くんを助けに行っただのかもしれない。

私は無事を祈るしかなかった。

白い霧の中、芙蓉は走っていた。

霧は芙蓉の術で他の者より目はきくが、全て認識出来ているわけではない。

それより今は草兼のもとに行くのが優先だ。

あの馬鹿、紅朧にどう考えても勝ち目は無いのに闘おうとするんだから。

こちらは物事が片付き次第、説教するつもりだ。

しかし、紫苑を紅朧から引き離したのは褒めるべきなのでそこまで厳しくは言わない。

「……………」

走っていて思った。

「霧が濃くないか……？」

立ち止まり、辺りを見渡す。

やっぱり、濃い。

芙蓉はあれから術を使っではない。

ならば別の者が同じか似た術を使ったということ。

芙蓉の頭に浮かぶ限り、鬼討士の中にこの術を使える者はいない。使うことの出来る素質のある者はいるが、術は急に使えるものではない。

なら、誰か。

そう考えると、一人だけ、出来る者がいた。

「まさかな」

この状態で今の所、圧倒的に不利なのは焰大蛇を出した紅朧だ。それを何故、仲間が阻む。

「……それより、草兼を」

再び走りだそうとして、……走りだせなかった。

「なっ……」

黒い瞳を大きく開く。

全く気配に気付かなかった。

片腕を掴まれているこの近さにすれば、立ち止まっている間にはもう居たということになる。

「……まだ、完全に癒えていないな」

その者は、袖口を捲って南の村で負った、赤く走る傷痕を見ていた。

芙蓉が思っていた、霧を濃くする術を使える者。

芙蓉はその名を口にした。

「深蓮……！」

碧い瞳が、傷痕から向きを変え、芙蓉の顔を映した。

九 鬼の情

旺璃至に言われ渋々向かった南の村で彼女はその傷を負った。
この目の前で。

村人を庇い、鬼の爪をその身に受けた。
もう少し早ければ、少しでも走っていれば間に合っただろうか。
あの爪はとても痛い爪だ。あんなもので傷つけてはいけない。
そう思い伸ばした手は僅かに届かず、虚しく空を掴み、目の前で
鮮やかな赤が散った。

白い素肌に醜く走る赤い傷に今だに苛立ちが募る。彼女を傷付けた鬼か。否、違う。何よりも己に。

だが、傷が化膿していないことには安心した。人は鬼より癒えるのが遅い。もしかしたらかすり傷に一年もかけて癒すのではないか
と思ってしまう程にだ。

「離せ」

驚きで見開かれていた瞳が一瞬にして険しいものになっていた。

「芙蓉……」

名を呼んでもその険しさに揺らぎは見られない。

「離せ、何用だ」

冷静に彼女は言葉を紡いだ。眉間に寄った皺が緊迫感をより増させる。

「伝えたいことがあるんだ」

怪訝そうに彼女は首を傾げた。黒い艶やかな横髪が白い頬にかか
る。牙を向けてこないから言って良いらしい。

「よく聴いて」

掴んでいた腕を引き寄せる。抵抗されたが、力の差はこちらの方

が上だ。

「っ！」

息を飲む音がはっきりと聞き取れた。頬に彼女の頭が当たる。ふわりと懐かしい香りがした。

そつと、指を髪に絡ませる。

「……あまり力を使うな」

その言葉の意味を、彼女はわかっただろう。

いや、わかっているはずだ。

それは何よりも、抱き寄せたこの腕から伝わっている。

ぱん、と手を打つ音が響いた。その腕には赤茶色の玉が連なった
大きい数珠。

「行け！火狐ひこ！」

阿來の可愛い声に何処から出てきたんだろう、尻尾が炎で出来た
小狐たちが駆け出した。その勢いで襲い掛かってくる鬼たちに飛び
ついていく。

「ぐっ」「があっ」

焼け爛れた自分の顔に悲鳴を上げたり、掻きまったりして鬼たち
は倒れていく。

「いやっ……」

どさどさと土埃を上げて地面に伏せていく残酷な光景に耐えきれ
ず、阿來の小さな背に隠れた。

「大丈夫じゃ紫苑、怖いであろうがこの阿來に任せておけ！」

この光景に場違いな阿來のはつらつとした声に私はおとなしく頷
くしかない。

「大丈夫じゃ」

そう言って阿來は足を肩幅に開いた。

「ぐ……」「ぐおおっ……」

霧の中からまた鬼たちが現れる。

「くらえ！火俵ひくろま！」

数珠を振った方向に火の渦が巻き上がる。

「ぎゃああああ」

少しだけ、熱風を感じた。耳が裂けるような断末魔が轟く。怖くて目を閉じたけど、それでも周りがどんな様子か嫌でも知ってしまった。

瞼の裏の真つ暗な闇。

その闇の静けさにしばらく溶け込んでしまいたいくらい、ここは怖い。

「舞え！燈輪揚羽蝶とうりんあげは！」

……でも、ここへ来たのは私の意志だ。芙蓉さんや阿來に無理を言って連れて来てもらって足手まといになってる。草兼くんは大丈夫かな、一番迷惑をかけたかもしれない…。

『おい、力を貸せ』

ふと、顔を歪ませながら言った草兼くんの言葉が頭をよぎった。

「私が出来ないわけじゃないんだよね…」

「紫苑？」

あの状況で草兼くんが私に言ったんだ。きっと冗談なんかじゃない。

「阿來、」

私は首を傾げる阿來に向かって言った。

「術の使い方を教えて！」

阿來は思ってた通りに、目を丸くした。

「なっ…！紫苑、おぬしにはまだ術を使うには危険すぎる！」

「でも、私にも鬼討士の力はあるんでしょ？」

「しかしじゃ、紫苑はこの世界に来たばかり、体がまだ慣れておらんだ。無理矢理に術を発動させれば体が壊れかねないぞ」

「阿來お願い！」

気づいたら、自然と阿來の手をとっていた。

「助けたいの、私が出るかわからないけど、少しだけでも力になりたい！草兼くんや芙蓉さんたちのためにも……………、紅隴や鬼たちのためにも」

でも、その言葉は途中で遮られて「紅隴たちのため」というのは伝えられなかった。

『お前など、嫌いだ！！』

遮ったのは悲鳴や怒りの入り混じったような響き、違う、むしろ傷に爪を立てられたような、痛い響き…。

遠くからでも、この声に覚えは十分あった。

「む…………、霧が晴れたぞ」

阿來の言葉に弾けたように私は走っていた。

「お、おい、紫苑！？」

「霧が、晴れたな」

隣で呑気に旺璃至が体を伸ばしている。

それでもまだ夜であるから視界は良いとは言えないだろう。人間には、だ。

もう焰大蛇は戻した。召喚した場所があれば主と云えど、大蛇の機嫌を保つのは難しい。

「……………」

もうそろそろ、ここにいるのも飽きてきた。適当にあしらって帰るうかと考えているうちに霧が晴れた。

そういえば、深蓮は何処にいるのかと辺りに目を向けた時、

「芙蓉さん！！！」

あの声だ。姫神子の。

自然と姫神子に目を向けていた。彼女の走り行く先に、鬼討士の女がいる。

「何故だ…？」

その女の手が赤い。

適当について行きたいと連れて来た鬼たちを倒したとしても、女の力を考えれば返り血を受けすぎだ。

「芙蓉さんっ…！！」

姫神子が息を飲む。彼女の視線が女から別の方へ向いていた。

「深蓮さん…！！？」

「あれは…！！」

気づいた旺璃至が隣で唸る。その時にはもう、駆け出していた。

「深蓮っ…！！！」

走りついて目にした光景に体が凍りついた。

「芙蓉さんっ…！！」

「姫様…、ここを離れられて下さい」

芙蓉さんの真っ赤な手は一振りの短刀を握っていた。

まさか…。

思った通りだった。

「深蓮さん…！！？」

その人は、少し離れた場所にいた。右手で体の左胸から左腹部にかけてを抑え、左手を地につけて体を支えた座り込んだ痛々しい姿で。

「く…っ…！！！」

苦しそくに歯噛み、鼓動に合わせて血の雫が土に染み入る。淡い色の着物がその傷の深さを教えた。

「深蓮っ…！！！」

紅朧が血相を変えて走り寄る。

「大丈夫か!？」

遅れて旺璃至が駆け寄った。

「紅朧、深蓮の体をむやみに動かしてはいけない、止血だ」

旺璃至が自分の着物の裾を破いて傷口を抑える。その手つきはすごく的確で、あつという間にきれいに巻かれていた。

「立てるか? 深蓮」

旺璃至の問いに深蓮さんは嫌な脂汗をかきながら頷いた。

「……………」

その間、紅朧は何もしないで小さな子どもみたいに立ち尽くしていた。

「どうした紫苑、…ん、芙蓉?」

阿來が芙蓉さんの手を見て顔をしかめた。

「……………女、」

体が凍ってしまいそうな声、その声の主の右手に炎の陽炎が揺らいでいる。

「よくも深蓮を…っ」

陽炎がはつきりと、一本の太刀の姿を現した。

「紅朧…、駄目だ…」

深蓮さんの声はもう、紅朧の耳には届かない。

その太刀は一メートルは余裕で越えた大きさと幅も太いから、かなり重厚さがあつた。それを軽々と片手で構え、紅朧は芙蓉さんを睨みつける。

「許さない…!」

その太刀の名は、斬馬刀。

芙蓉さんに貸してもらった巻物の隅にこう書いてあつたのを思い出した。

『鬼という生き物は鬼というのに人間よりも情が深いらしい。一度でも心を許した相手には命をかけてでも守り通そうとする。その相手が人間であつてもだ。もちろん、それは鬼たちの中での関係、家族や友人、恋人もあたる。だからこそ、その者たちが傷つけられれば、我が身が裂けるような痛みを感じるのだ』

九 鬼の情（後書き）

大、変、遅れて申し訳ございません（T T）
最近、なんやらかんやらで忙しすぎる作者です（。。（）

やっと九話……（おせえ）

次話をもっと早く書けたらいいなと；

思った以上になかなかストーリーが進まず悩んでいます、まあ、
内容が内容なんで仕方ないなと（おい）

軽く二ヶ月も更新していなかったのにお気に入り登録をして下さった方、ありがとうございます。

しかし、文章力欲しいわ；

こんなんでせめてものストーリー性にしか力のない小説ですが、少しでもキャラたちを気に入っていただければうれしく思います（ノ
、*）

…いまだ、作者お気に入りキャラが出てこないのが不満ですが；
時間が出来次第、ちまちま執筆投稿するのでよろしくお願いします。

2010/7/23 DAISY・Rosés

十 黎明

「許さない…！」

ぎりぎりど噛み締める歯の音が異様に大きく聞こえて背筋がすつと冷えた。冷えたというなら伏水さんが怪我したときからだけど、それをも凌ぐ戦慄。

その手に握られた刀の刀身には揺らめく炎が硝子に閉じ込められたように映っていた。

ヒュツと刃が空を斬った。紅隴が^{おおたち}大太刀を軽々と振り構える。

「姫様、離れて下さい」

芙蓉さんが目を紅隴に向けたまま言った。

「でも、芙蓉さんを置いていけません！私より、芙蓉さんの方が危ないし」

「出来ません、私が離れば紅隴は容赦なくこの村を焼き滅ぼします」

「でも…」

「ご安心ください姫様、私はこれでも姫様の次に鬼討士の力を持っているそうですから」

芙蓉さんは余裕ぶって笑ってみせた。だけど、私の不安はそう簡単に拭えない。

「よくも…！」

紅隴が踏み込み強い一撃が振り下ろされる。

「紫苑っ…！」

阿来に引つ張られて無理矢理芙蓉さんから引き離された。

「芙蓉さんっ！」

芙蓉さんの瞳は、紅隴から動かない。

「水留^{すじゐる}！」

芙蓉さんの白い手が上に払われた。地面から水が噴き出し、刀に生き物みたいに纏わり付く。じゅわつと水が蒸発する音が鳴った。

それでも刀の威力が衰えただけで、紅隴の刀を振り落とす物理的な攻撃は変わらない。

「…っ！」

芙蓉さんが短刀を握りなおす。

ギーン、と鋼の音が響いた。その勢いに土埃が舞い上がる。

「……………っ」

紅隴が退いて間合いを取った。紅い瞳が土埃を睨む。

「……………」

一方の芙蓉さんは口元がわずかに緩んでいた。

「少しは期待していたわ」

その余裕をたっぷり含んだような口調の意味は、土埃の隙間から黄金色に光ったものでわかった。

「草兼くん…？」

草兼の不満というイライラは絶頂に達していた。

「期待してたって呑気すぎだろうがっ！」

芙蓉が短刀で大太刀を受け止めようとした所で体が自然に前に出た。普通の太刀ならまだいいが、短刀なら当たり所によっては骨に罅^{ひび}が入る。いくら鬼討士の上位にいるからって無茶しすぎだ。

紅隴がまた間合いを詰めて馬鹿でかい太刀を振ってくる。

「雷切！」

黄金色に光る刀をかざして受け止める。重厚な金属音が響くと同時に、支えている足がわずかに地面に埋もれた。芙蓉の術で太刀の炎の攻撃は塞がれていて、金行の自分には少し歩^ぶが良い。それでもこの威力だ。物理的に女子供じゃ話にならない。

「芙蓉、離れてろ！」

さつきからこっちが押されっぱなしじゃないか。

紅隴を押し返し、相手が体勢を整えようとする一瞬の隙を狙う。

「やられっぱなしは性に合わねえんだよ！」

「！」

踏み込んで放った一撃を紅隴は飛びずさってかわす。かわすくらい、予想の視野に入っていた。

「剣烈鋼！！」

紅隴が飛びずさり着地する場所に尖った鉄鉾が数本、地中から突き刺すように現れる。

「くっ……！」

当たったかはわからないが、紅隴が唸った。

「行け、火魂！」

少しは負傷したらしい、険しい顔で紅隴は術を繰り出す。伏水がやられた、火の球の術だ。避ければ確実に村が家事になる。……いや、後ろには芙蓉がいるから、

「芙蓉っ、任せた！」

迷うことなく向かってくる火の球を避けた。

「ああ、水行の領織」

芙蓉が手に印を組んで目を閉じた。空気がひんやりとしたものに変わる。

火の球は威力を落とし、芙蓉の元に届くか届かない場所で消滅した。

水行の領織はこのある程度の範囲を水行の支配にさせる術で、火行には劣悪な環境だが木行にはとても良い環境になる、状況によっては敵を有利にしたり味方を動きにくくするものだ。

今の状態なら紅隴と阿来には悪いが伏水には良い。伏水は負傷しているから最も都合が良いのかも知れない。

この術を使っている者はこの環境を保つのにずっと体力を費やさなければならぬ。芙蓉のように鬼討士でも上位の力を持たないと難しい術でもある。

「っ……」

紅隴が息苦しそうに肩を揺らして連なる鉄鉾から出てくる。今の紅隴には炎の術を繰り出すのは難しい。剣の腕だけでなら多少は勝

算があるはずだ。

戻れ。そう腹の中で命じると鉄鉾はおとなしく地中に還^{かえ}った。
太刀を持ち直す。

「唸れ、雷切」

愛刀が黄金色に光る。息を飲み込んで間合いを詰めた。苦しい顔で紅隴は斬馬刀を構え、右に薙^ないだ。

刃がわずかに左頬を掠めたのを顔をずらして離し、空いた腹部を貫こうと太刀を振るう。しかし、それはすかさず刀を翻し制され、右の下腹部から蹴りを入れられた。

「ぐあ……っ」

痛みにもがく暇は無い。均衡の悪い相手の片足を蹴飛ばす。

「っ……！」

ズサツと土埃を舞わせて転がる紅隴に致命傷を負わせないと。長年教え込まれた鬼討士としての心構えが頭に浮かんでくる。すぐに刃に力を込めて振った。

「……っ、失せる！」

その一撃は熱風を帯びた覇気に体ごと押し返される。

紅隴は脂汗をかいていた。この最悪な環境では息をするのも苦し
いだろう。

「さすがは最強の鬼、と言った所か？」

誉めているか誉めていないかはこだわらないが、立場としては後
者だ。

それより、芙蓉だ。

「……………」

芙蓉は手に印を結んだまま、静かに術を紡ぎ続けていた。その頬
に汗が流れる。

まだ、何とか持ちそうだ。

「くそ……っ」

紅隴がゆらり、立ち上がる。

「炎智……………」

「紅朧、この状況で火行の術を使う気か？
…どういう馬鹿げた力だ」

「やめろっ！」

深蓮が吠えるが、彼らの耳には届いていないのはよくわかる。

「旺璃至、止めてくれ、紅朧を…！」

「喋るな深蓮、お前はおとなしくしてろ」

「けれど…」

「わかってる」

深蓮がそう望む理由を、その本当の思いを。

「……………？」

ふと、深蓮が反応した。

「旺璃至…、あれは…」

「え？」

そう言われ気づく。

純白の真珠色の光。

優しい温もりのある光。

「ちょっと、俺達には…、否、紅朧にもきついんじゃないか？今
まで聞いたことがない」

深蓮の瞳は驚くこともなく、静かに黎明の空を見つめるように見
ていた。

「女神のお出ました」

十一 鳴弦

京。

碁盤を彷彿とさせる真四角の升目状に屋敷がそれぞれ並んでいる。静まり返った夜の町並みに、騒ぎ走るのは人の目には映らぬ百鬼夜行たち。

その一角、北東のほうにある、数々屋敷の中でも大きい敷地を持つ屋敷の戸がガラリと開いた。

「うむ……」

輝く澄んだ星空に目を凝らす。長い時が刻まれた皺が目元に増えた。

「……ようやく、闇に光が差したようだ」

その見つめる先は彼方、西の空。

「紫苑、こつちじゃ」

阿來に引つ張られるままに、芙蓉さんから離れた場所に連れていかれていた。

「阿來、」

草兼くんが刃を振る、紅隴が避けた先で土から岩みたいなのが突き出た。

「っ……!!」

息が止まり、身体の底から冷え込んだ。地面にへたり込んでしまっ

「紫苑、辛いのなら見るでない」

阿來が優しく声をかけてくれる。

それでも顔を背けれない私の目に、温かいものが触れた。

「すまぬ……」

せめてもの気持ちだった。自分にはこれくらいしか出来ないけれど。

「すまぬな……」

紫苑をいいとどめておけば、こんな辛いものを見せずに済んだのかも知れない。

視界を塞いだ手に、冷たいものが当たった。その冷たさに心の臓が痛みつけられる。

「すまんのじゃ……」

……真つ暗な世界。

また、現実世界から切り離された場所にいる。

阿來の温もりを感じながら、見える世界は真つ暗だった。

あの世界とは違う……。

上も下も区別がつかない不思議な場所。歩いてみても問題は無いから魂だけがこの世界在るみたい。

遠くから水の音がする。近寄ってみると一本の川が流れていた。

川岸の砂利を踏み分けながら流れに沿って歩いてみると、闇の中からひとつの影、……ゆらゆらと舟が現れた。漕いでいるのは一人の老人だった。

ぼんやりとその様子を見てみると、老人は舟を岸边につけて地に足をつけるなり、私の方に歩いてくる。

薄汚いぼろぼろの衣を着て、笠を被っているから顔はよくわからないけど、その雰囲気は不気味さもあつたのにとても凜とした、神聖な感じがして私は逃げるのを自然と躊躇っていた。

「六文」

私へ手を伸ばし、老人が最初に言ったことは聞き慣れない言葉だ

った。

「……ろくもん？」

首を傾げると、老人は手を揺らして私にその“ろくもん”というのを求めてくる。

「何だい、弔いの時にお前の親兄弟は銭を一枚も握らせてくれなかつたのか？」

「弔い……？」

弔いつて、お葬式のことだから……つて、わ、私、死んでしまったの？

「もしや……、死んでしまったのに気づかないでここへ着てしまった哀れな魂か」

きよとんとした私に老人はそう言つて、うんうんと首を頷き自分で納得するなり、

「残念だが私の役目では手におえないんだよ。若い娘だからこつするのを見るに辛いかな」

と言いつて舟へ戻つていった。

意味がわからないでぼんやりしていると肩を急に捕まれ、後ろを向かされた。

「おい、娘、」

今度は私よりかなり体の大きい老婆だった。けれど、その目は肉食動物みたいにぎらぎらしていて身がすくんだ。

「金が無いならその衣置いていきな。………ん？」

そのぎらぎらが私の顔を覗き込んでくる。

「………そうか、」

老婆は静かに目を伏せると、舟の老人を呼んだ。

「何だ、奪衣婆」

「この者を川の源流の宮へ」

「は？」

「川の源流、道返の宮に連れていけ」

老人は私の方を見て、口元しか見えなかつたけど微笑んでいた。

「そうかい……。川を登るなんてどれくらいぶりになるだろうな」

言われるがまま、舟に乗せられて老人はその骨張った腕からは考えられない強い力で舟を漕ぎ出す。老婆はそれ以上は何も言わないで闇に紛れてしまつまで舟を見送っていた。

本当に静かな場所だった。虫の声も一切しない。

ぼんやり、真つ暗な世界を見ているとゆらゆらと複数の白い陽炎が一瞬だけ現れて、すぐに散るように消えていった。

それは真夏の蛍みたいで綺麗だった。

「あまり見惚れるものではないぞ。あれは彷徨った魂の欠片たちだ」
老人が漕ぎながら言った。

「彷徨う理由は様々だが……。お前のような者の魂はあれらにとつては上級の餌だ。呆けつぼとしてしていると魂を喰われるぞ」

慌てて目を逸らす。その様子に老人から笑われたような気がしたけど。

また蛍のように魂の欠片たちが綺麗な光を見せ付けていく。その光のひとつに、とても見覚えがあった。

「芙蓉さん……。!?」

一瞬だったけど、あの姿は確かに、

「この世界では迂闊に人の名を口にするな」

「……すみません」

老人に注意されてから私はこの世界では口を開かないことにした。でも、何で芙蓉さんがここにいるの？

そう思っているうちに水の音がやたらと強くなってきた。

「……ほれ、あそこだ」

老人が指差した先には、高く切り立った山の崖から勢いよく落ちる大きな滝があった。その凄まじい勢いで滝壺は白い飛沫で見えない。

「あの滝の裏に宮はある」

老人は岸辺に舟をつけると私を下ろした。

「私はこれ以上神域に入ってはならないからな」

そう言つて、老人はそそくさ舟を動かして下流へ戻つていく。
そんなこと言われても……。滝なんて小学校の修学旅行で遠くから見ただけだし…。

とりあえず、近づいてはみたけどどう滝の裏に入っているのかわからない。

滝壺に呑み込まれないように気をつけて、滝の周りを見てまわつた。真横から除いてみると、滝と山肌の間は一メートルくらいのすき間があつて、山肌の僅かな出っ張りが連なりが裏に入る道になっている。

ここからかな。

足を滑らせないように裏へと近づく。山肌はどっちかと言つたら湿った岩肌で、本当にこんな所に宮とかあるんだろうかと思う。

何とか滝の裏に入っていくと、真ん中あたりに奥行きがあつた。岩肌に手をつきながら進んでいくと行き止まりになつていた。

やっぱり、宮なんて嘘なんだ。……戻らないと。阿来や草兼くんたちが心配だ。でも、心の何処かで私が行つたつて足手まといではないと思つてる。

とぼとぼ滝の唸る方に戻りながら考えてるけど、私がここにどうやって来たのかもわからない。

滝の淵あたりで立ち止まって、僅かな出っ張りを確認する。

私つて、何やつてるんだろ。皆、大変なのに。戻らないといけな
いのに。

でも、私が行つたつて…。

ミシッ…

「……………」

滝の音ではつきり聞こえないけど、変な音がする。

ミシ…ミシミシッ…

「え…？」

辺りを見ても特に変わってる様子は無い。

「何……」

探しているうちに、その異変は徐々に現れた。

「地震？」

上下に揺れている。ここじゃ危ない。

急いで近い真ん中の洞窟に戻る。そこで見たのは、信じられないものだった。

「うそ……」

それはとても神聖な美しいものだった。暗い洞窟の奥の方でひとつの岩が青白く光っていた。その岩がゆっくりと動いている。

「きゃっ！」

その時、驚きで足を滑らせてしまった。体が背後の滝へと引っ張られる。

滝壺に呑み込まれる！

水に打ち付けられる痛みを覚悟して、私はぎゅっと目を閉じた。

……………？

……………。

……………痛みが、しない。

「っ……………」

ゆっくりと目を開いた。

「……………。」

また、真つ暗な闇。

私は何処かに仰向けで寝かされていた。

「大丈夫か、姫神子よ」

呼びかけられて、はっと体を起こす。

「あの、あなたは……」

声をかけてきた人は阿來たちとは違う着物を纏っていた。ふと、歴史の教科書で見た弥生時代あたりの衣に似ているのに気付く。

「姫神子が、私に触れたのだ」

その人は私の質問に答えず急に語り始めた。普通だったら怒るんだけど、こここの所、こういうことが多過ぎて慣れてきてる。

「はい…？」

とりあえず、この人が言い出したことがわからない。というか、触った覚えがない。

「あなたが助けてくれたんですか？」

触ったって言うならこれくらいしか思いつかないけど…。

その人は静かに頷いてから口を開いた。

「危ない所だった。間に合ってよかったと思う」

「あ、ありがとうございます」

不思議な人…。ずっと無表情。

「姫神子、こちら参れ」

その人は急にくるりと後ろを向いて歩きだす。真つ暗闇に置いていかれるのが怖くて慌ててその後を追いかけた。

「ここだ」

歩いてそんなに時間がかかっていない場所その人は立ち止まらなり、座り込んで深々と頭を闇に向かって下げた。

「姫神子が参りました」

私はどうしていいのかわからなくて、その後ろで立っていると、闇から声がした。

「戻ってよい、道返の大神^{おおかみ}」

声と同時に闇が光に包まれた。目が闇に慣れていたので眩しい。

何とか目を開いて見てみると、闇の中に黄金色と銀色に輝く立派な神社が現れていた。

「御意」

そう言つてその人……、道返の大神は姿を消した。

輝く神社から一人の姿がこつちにゆっくりと歩いてくる。顔は逆光でよく見えない。

「よくぞ参られました。姫神子の名を受ける者よ」

その人の格好はさっきの道返の大神と似ていて、腰に剣、背に弓

矢を背負っていた。

「貴女をお連れしたのは道返の大神という神。先程の人の姿は仮のもので、本当の姿は滝の裏にあるひとつの岩です。岩には目がありません。姫神子が触れたことで貴女に気付き、動くことが出来たのです。そして、ここはその道返の大神が塞いでいた、その奥……」

光が落ち着いて、この人の艶やかな黒髪、綺麗な輪郭、凜とした黒い瞳がはつきりと現れる。

「私は月読つぐよみ。この世界、根の国を統べる者」

何処かで聞いたことがある名前……。

「貴女を呼んだのは、貴女に渡すべきものがあつたため」

月読という人、……じゃなくて神様はそう言つて一旦、社やしろに戻ると、大切そうに布に包まれた縦長いものを持つてきた。

「この使い方は貴女の中の姫神子が教えてくれます」

渡されたものの長さは二メートルは超えていて、思ったよりも重くはなかつた。

「では、これを持って現うつし世に還りなさい」

「あの……」

「何でしょう」

月読さんは優しい眼差しで見つめ返してきた。

「私、これがあつたら皆の役に立てるんですか？」

月読さんは目を丸くした。けど、すぐに優しく微笑んで、

「貴女は姫神子です。姫神子は鬼討士の力を持った者が誰でもなれるではありません。その者の器量や魂の性質、何よりも貴女の性格が姫神子であることを定めているのです。まだ、貴女は己に自信が無いようですが、貴女は純粹に姫神子になる者です」

月読さんは続けた。

「何か利があるかもしれないという時に、役に立つか役に立たないか、上手くいくかいかないか、考えてから物事を行うのはやめなさい。やってみないとわからないことが本当は多いのだから。最初から諦めていては、いくら可能性があつたって出来なくなつてしま

ます」

月読さんは本当に黒く澄んだ瞳をしていた。男の人なのに物言いや動きが丁寧で、本当にきれいなものを見てる気分になる。

「早く…、早く戻らないといけないんです」

「……………」

「私の目前で人と鬼が争つてて、本当は優しい人たちなのに傷付けあっています。まだ、私はよくわからないから、どうしたら正しいのかわからないけど、止めたいんです」

「……………そうですか」

「早く戻つて、私が出ること、しないと…」

「焦らずとも安心してよいのですよ。現し世と根の国は時の流れが全く違う。ここで長居してもあちらの時間を上手くあわせれば大丈夫ですから」

社の光の色がだんだん青白くなっていく。

「多少の困難はあるでしょうが、貴女なら大丈夫です」

その手が、頬に触れた。

「貴女は人の痛みがわかる、とても思いやりのある人だ。それは最高の武器になる」

急に視界が真っ白になった。

現し世に還される瞬間だった。

ひやっとした空気が肌に触れた。

はっと目をやると阿來が苦しそうに地面に手をついて息をしている。

「阿來…？」

「だっ、大丈夫じゃ。芙蓉が草兼を助けるのに水行の術をしているだけだからのう！」

阿來が無理をしているのは言わなくてもわかった。

ふと、草兼くと紅隴の攻防を見る。

「止めなきや……」

立ち上がったて、私の中の私に訴える。

教えて！私が出来ることを！誰も傷付けない、私が出来る方法を！

「紫苑……？」

紫苑の様子がおかしい。

急に立ち上がったと思えば、何かを呟きながら構えの体勢を取っている。何の体勢かはすぐわかった。

「弓矢……？」

その構えに合わせるように白い光が形取って、紫苑の姿が光に溢れていく。

「お願い……、上手く当たって！」 張られた光の糸が強く引つ張られた。

「炎智……」

「……どういう馬鹿げた力だ」

紅隴は、繰り出す力で目の前の鬼討士を灰にする気でした。

鬼の暴走もあるが、本能が草兼という鬼討士を否定している。芙蓉という鬼討士も許せないが、自分でも訳がわからないさつきから頭がごちゃごちゃしていて怒りの向けよりの宛があつちこつちにある。だが、あるようで無い。それでも、この鬼討士には向けようがいくらでもある。

「炎智、立っ……」

ビィーン

「……………なっ!？」

体が、動かない。

頭の奥を打たれたような強い衝撃が走り抜けて意識が遠くに切り離された。

「……………」

術を紡ごうとした口を開いたまま、紅朧は地面に倒れ伏せた。

「…何なんだ？」

「鳴弦…」

意味もわからず立ちつくす草兼に芙蓉は術を解いて教えた。

「弓矢は基本的に矢を飛ばして敵を攻撃するものだけれど、弓の弦の鳴る音は魔よけの効果があると言われている。姫様の出した武器は破魔弓の一種。なら、狙われた紅朧が倒れるのも当たり前だ」

「それなら、俺でも出来るじゃないか」

「無理よ。紅朧ぐらいの鬼になるとそこらへんの弓での鳴弦は無駄でしかない」

けれど、鳴弦という攻撃を選んだのは姫様らしい。鳴弦は物質の矢の攻撃ではなくて、邪よを射ぬくだけの攻撃。誰も傷付けない、姫様らしい攻撃だ。

「あの弓、伝承の通りなら…」「伝承？」

「…草兼、屋敷に戻ったらすぐに蔵の書を読みなさい。すぐに、片っ端から」

「ええ!？」

喚く草兼は構わず、姫様の元に急いだ。いくら姫様でも、急に術を使うのは体への代償が大きい。

「姫様っ…」

そこには一人呆然とし、地面にへたり込んだ姫神子がいた。

紅朧が倒れている。

私が一番願ったのは、誰も傷つかないこと。

そう訴えていたら、頭に鳴弦という術が浮かんだ。そしたら、月読さんに貰ったものの出し方も頭に次々浮かんできて…、

「姫様っ」

「紫苑っ、大丈夫か？」

芙蓉さんや阿來が顔を覗き込んで心配してくれてる。

でも、紅朧が倒れている。

私が望んだものじゃない。

「紫苑っ」

意識が遠くなっていく。

その途絶える僅かな視野に、一匹の黒い猫が私のほうを見ていた。

十一 鳴弦（後書き）

阿來じゃ。

む、後書きに何故わしが出ているのかじゃと？

教えてあげようではないか！

この紅臙の作者が、各きゃらくたあのぷろふいーるなるものを紹介していったりするのに、せっかくならこの天才術士、阿來を起用しようということになったのじゃ！

うんうん、作者、良い感性をしているではないか。

では、とりあえず、作者がここまで読んでくれた皆に言いたいことをまとめた書いた紙を読むぞ。

相変わらず読みにくく、わかりにくい文章でごめんなさい。

しかも、今回は長い文章でごめんなさい。

その上、更新が遅くてごめんなさい。

基本は日本神話を題材にしていますが、たまに仏教のものが出てきますが気にしないでください。

……………なんじゃこの謝ってばかりの文章は。

仕方ないないのう。この阿來が一肌脱いでやるうではないか。

と言っても、まだまだ先は長いようなのでちょっとお預けじゃぞ。

ああ、そうじゃ、
せつかなのだからな。

この阿來のぷるふいーるを
おぬしに特別に紹介するぞ！

名前：城東 阿來

五行・十干：火行・丁

年齢：実は十七歳なのじゃ。

誕生日：皐月「5月」の初めあたりじゃ。

血液型：なんじゃそれは。

身長：紫苑が言うには一めえとるも無いそうじゃ。

体重：作者が言うには二十五きろも無いそうじゃ。何故作者が知っ
ているのだ？

好きな食べ物：甘いもの

嫌いな食べ物：魚「骨が面倒くさい」・人参「芙蓉に飲まされた、
人参の入った漢方薬が苦かったからじゃ」

武器：御統^{みすまると}。数珠みたに見えるが、所々に勾玉が連なっているの
じゃ。

象徴花：紅花・向日葵

イメージカラー：朱色

うむ、こんなものかのう。
所々謎じゃがな…。

では、これからも紅臙を読んでやってほしいのじゃ！
よろしく願いますぞ！

十二 芽生え

真つ暗な闇で、一人歩く後ろ姿があった。

「紅隴っ」

追いかけて呼んでみると、紅隴は足を止めた。

「よかった、無事だったんだね」

ほっと息をつく私に紅隴は振り返って片手の掌を私に見せた。

「これは、お前か？」

「……………っ！」

真つ赤に汚れた手。

紅隴の姿をよく見ると、頭や胸から爛れるように血が溢れ、白い衣を染めている。

「これは、お前か？」

紅隴の表情は怒りも悲しみも無い、無表情だった。

ずい、とその手を突き出される。

「お前が、やったのか？」

「いや…、」

焼け付いた鉄の禍禍まがまがしい臭いが鼻を貫く。

「嫌あああああっ！！」

「姫様っ！？」

屋敷中に響き渡った声に芙蓉は急いで紫苑の部屋に向かった。

「姫様、失礼いたします」

襖を開けると、そこには紫苑が布団から上半身を起こして髪の乱れた頭をおさえていた。

「姫様、悪い夢でも見られましたか？」

そつと震える肩に手を乗せると、紫苑は体をびくりと反応させて、瞳孔が開いた目で芙蓉を見た。

「芙蓉さん…、私…っ」

震えを必死に抑えているのがわかる。それでも、齒がガチガチ鳴ってしまっている。

「私…、紅朧を…っ！」

芙蓉は優しく紫苑を抱きしめた。

「大丈夫ですよ、姫様。紅朧はあの時、気を失っただけです」

紫苑の瞳が揺れた。

「姫様の放った鳴弦の技は、成功していました。鳴弦は誰も傷つけない。だから、姫様はそれを選んでのでしょうか？失敗して紅朧を傷つけたりはしておりませんからご安心ください」

紅朧は傷ついて、いない…。

「本当、に…？」

「芙蓉は姫様に嘘をつくことはけしてありません」

「そっか…」

すると、紫苑の目から自然と涙が零れた。

「よかった…」

ぼろぼろ、ぼろぼろと溢れんばかりに。

阿來は紫苑の悲鳴にドタバタ走って来た。あいにく、その時阿來は紫苑の部屋からは一番遠い所にいたので遅れてしまったのだ。

「む…」

その開けられた襖の陰に珍しい人がいた。

「……………」

何も言わず、紫苑たちの様子を見ている。

「草兼…？」

「！」

呼びかけてみると、すぐに阿來の姿を見て足早に何処かへ行ってしまうた。

「……………心配なら、一言くらい声をかけて行けば良いものを」

芙蓉が呆れた口調で言った。草薙が隠れていたのに気づいていたらしい。

「本当に素直ではない」

私と紅隴が気を失った後、旺璃至は紅隴を抱えておとなしく森に帰ったらしい。もちろん、深蓮さんも負傷していたから他の鬼の手を借りながら。

火傷を負った伏水さんは、今は療養中だけど体を動かしたりすることには問題無くて普段通りの生活をしているそう。

そして私は、気を失ったまま屋敷に運ばれて眠っていた。芙蓉さんが言うには、いきなり姫神子の力を発揮させたから、しばらくは体が疲れやすくなったりするんだって。当分は無理をしないで休むように言われた。

そうは言われても、

「暇、だなあ」

縁側でごろごろとしてみる。誰も周りにいないから出来ること。久々の開放感があつて気持ちいい。お昼の温かいひなたぼっこで目がとろーんとしてくる。

阿來は畑作業を手伝いに行つたし、芙蓉さんは昨夜の件で結界を結び直したりしないといけないとか……。

「でも、良かった……」

紅隴が倒れた瞬間、心臓をえぐり取られたような、凍りついたような、そんな恐怖が纏わり付いた。あの時の、今までに感じたことの無い戦慄ははつきりと覚えてる。ホント、気絶してただけで良かった。

「……本当に、大丈夫なのかな」

胸中に浮かんだ感情に、ふと言葉が零れた。それに、深蓮さんもいてもたつてもいられないわけじゃないし、芙蓉さんのことが信じられないわけじゃない。あれだけ言ってくれたんだから。

「ただ、すっきりしない。やっぱり自分で確かめないと。」

「でも、どうしたらいいのかわからないし……って、きゃっ！」

ゴン

「縁側はそんなに広くないことを忘れていた。」

「っ……、いったあ……」

「ごろごろしていた勢いで庭に落ちて、おでこを打っちゃうなんて

……は、恥ずかしい。って、誰も見てないよね。

「周りを見渡してみただけ、誰かいる様子は無い。」

「良かった……」

「ほっと息をついて、縁側に座る。」

「にゃあ」

「え……?」

「前を向くと、庭に一匹の黒猫が座っていた。」

「誰も見てないけど、猫には見られちゃったか。」

「……誰か飼ってるのかな」

「用意してあった草履を履いて猫に近寄る。そういえば、気を失う

「間に黒い猫を見たような気が……」

「にゃー」

「そつと手を伸ばすと猫はぴょんと跳んで建物の陰に逃げてしまっ

「た。」

「ちよつと待っ……」

「その陰を覗くと、もう、猫はいなかった。」

「猫だし、逃げ足も早いもんね。でも、今は早すぎな気がする。」

「……あの猫、両目の色が違かったなあ」

「また見かけてもすぐわかるね。」

「絶対、あの毛並み、気持ちいいはず！」

「かわいい生き物を見かけると皆そう思うはず。」

「また暇になっちゃったなあ……」

「縁側に戻ってまた暇つぶしを考える。普通だったら、今頃の時間、学校行ってるはずなんだけど。……って言ってもすんなり戻れるわ

けじゃないし。

暇つぶしに私は屋敷を見てまわることにした。大きいから迷子にならないように今のうちに覚えておこう。

「あつちが皆の部屋になるから……、ここが皆で食事をする広間、……こつちがご飯を膳に準備する所で、隣が調理場と倉庫……つと。

……広いなあ」

まだ半分もまわれてないのに疲れてきた。

「これは姫神子様」

「伏水さん。大丈夫なんですか？」

「おかげさまで。いかがなされておられるのですか？」

体の所々に包帯が巻いてあるけど、伏水さんの表情からだいぶ調子が良いのがわかる。

「屋敷で迷わなくていいように見てまわっているんです」

「そうですか」

伏水さんはうんうんと満足げに頷く。

「案内なら芙蓉や阿來にさせたいのですが……、ああ、草兼は確か今屋敷にいるはずです。草兼に案内させましょうか？」

草兼くんか……。そういえば、芙蓉さんが気絶した私を運んでくれたのは草兼くんって言うてたから、お礼言わないと。でも、朝から会っていないし……。

「大丈夫です、ゆっくり見ていきたいんで」

「わかりました。ところで姫神子様、貴女に紹介したい者がおりまして。ほら、隠れていないで出てきなさい」

伏水さんが呼び掛けると伏水さんの影から小柄な女の子が出てきた。黒い長い髪を少し結っていて、昔話のお姫様みたいに可愛いコだ。たしか、伏水さんが怪我をしたときに側にいた女の子じゃないっけ。

「乙音おとねといいます。鬼討士おにうしとしてはまだまだですが、少しはお役に立てるとます。五行は水、十干は癸です」

「よ、よろしく願います」

雪みたいな肌を薄紅に染めてお姫様は挨拶をした。

「紫苑です。よろしくお願いします」

挨拶をすると、女の子は顔をより赤らめて下を向く。

「乙音、姫神子様に挨拶をして頂いているのに恥ずかしくてよそ見をするのは失礼だろう」

「う、ごめんなさい」

伏水さんはやれやれといった表情で乙音さんを見ると、私に向き直って申し訳なさそうに口を開いた。

「お分かりでしょうが、乙音はかなりの恥ずかしがり屋です。姫神子様に慣れてきたらこのような失態は無いと思いますが…」

「大丈夫ですよ。乙音さんって、私とだいたい同じくらいの年ですよね」

「ええ、確か草兼より二つ下です」

じゃあ、同じくらいの良い女友達になりそう。

そう思っていると、伏水さんが用事があつたんだと少し慌てて屋敷のどこかに行ってしまった。その後を乙音さんが付き添うように追う。

やっぱり…、さつきから見えて思っていたけど、乙音さん、伏水さんのこと好きなんだろうな。

彼女のひとつひとつの動作にそう思う。

でも、伏水さんは気づいてないみたいだった。

「あんなに可愛いコなのに…。もったいないなあ」

「…邪魔だ」

「えっ!？」

後ろからの急な声に私は飛び上がって振り返る。

真っ先に視界に入ってきたのは高く積まれた本の山…。山？

「どけ」

ゆらりと本の山が揺れる。

「なっ…」

慌てて廊下の端っこにずれると、その山は一気にドサーッと廊下

に崩れ落ちた。

「……………チツ」

声の主がしゃがんで本つ当に機嫌悪そうに本を集めだす。

「く…、草兼、くん？」

草兼くんは私を見向きもしないで本を重ねていく。

「手伝うよ」

どうせ暇だし、それにお礼も言わないといけないから。

「……………」

私が隣で本を集めていても草兼は終始無言だった。

「これで全部かな」

ひとつに集めて草兼くんに渡す。全部だとまた崩れてしまいそうだから、少しだけ私が持った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………行かないの？」

私の持つ本をずっと草兼くんは見ている。

「持たなくていい」

「え、でもまた倒しちゃうよ」

「女に力仕事に手を使わせるのはよくない」

ぶっきらぼうに言ってるけど、草兼くんってそういう所はしっかりしてるんだ。

「でも、また倒しちゃったから手伝うよ。それに五冊くらい力仕事にならないって」

草兼くんは怒ったみたいな顔で私を見た。それを無視して私は廊下を先に歩く。

「どこに持っていくの？草兼くんの部屋？」

草兼くんは少しだけ無言だったけど、

「……………俺の部屋だ」

と、困惑した顔で言った。

先に行く草兼くんについていく。
私の部屋より少し遠い所にあるんだ。

「ここだ」

草兼くんはとある部屋の襖を開く。部屋の隅に本を置くと、私から本を受け取ってその隣に置いた。

あ、忘れないうちに言わないと。

「あのね、草兼くん」

草兼くんは目だけを向かせた。

「私が気を失った後、草兼くんが屋敷に私を運んでくれたんでしょ。ごめんね。そして、ありがとう」

「……………」

「重たかったでしょ？」

苦笑いして草兼くんに言ってみる。

「……………いや、それは俺が言つべきだ」

「？」

「その、…あ、……………あり」

草兼くんは何だか難しいようなくすぐったいような顔をしてる。

「あり…、が」

「しっおーん！ー！」

阿來の元気な声が屋敷中に響き渡った。

「あ…阿來…？」

草兼くんが舌打ちする。

「出る」

「え？」

「部屋から出る」

急に草兼くんは苛立って少し乱暴に部屋から廊下に私を押し出した。

「草兼くん…っ？」

その時、廊下に阿來が現れた。

「紫苑、ここにいたのか。畑仕事が意外に早く終わってのう」

「……………」

「草兼？」

草兼さんの部屋の前に立ちすくむ私に阿來の元気な笑顔が固まる。

「……………」

草兼くんは何も言わず、阿來を睨みつけるように見て、ピシヤリと襖を閉めた。

「草兼くん…？」

私の呼びかけに草兼くんは返事をしなかった。

「阿來…」

「ま、まあ、わしの部屋にでも来るがよいぞ」

阿來の作った笑顔が強張っていたのは阿來には言えなかった。

黒い漆塗りの廊下を進み、奥の部屋の障子を開く。

「……………」

中にいた鬼はこちらの様子を気にすることなく、縁側で向こうの庭の様子を見ている。部屋の真ん中には布団がひとつ敷いてあった。

「香纏に作ってもらった」

持ってきた盆を畳の上に置く。

「薬湯だ。温かいうちに飲んだらいいらしい」

「いらない」

素っ気ない返答は想定内だ。

「せっかく香纏が作ってくれたんだ。飲んでやれよ」

「深蓮は？」

外を眺めたまま尋ねる。

「ああ、深蓮は自分の屋敷で安静にしてるよ。香纏が言うには二、三日おとなしくしていれば大丈夫だそうだ」

「…そうか」

そう呟いて鬼は空を見上げる。

庭に植えられた立派な桜が盛りを終え、散り急いでいた。

優しい風が凪いで、紅い髪が翻る。

ひらりと部屋に迷い込んだ一枚の花びらを手に取り、ぼんやりとした目でまじまじと見つめる。

「旺璃至、」

「何だい」

淡い薄紅の花びらを不思議そうに見ながら、鬼は聞いた。

「あの女…、何と言う名だ？」

「あの女…？姫神子のことか？」

「……………」

答えないのはそれで正しいからだ。

あの紅朧が、珍しい。

「紫苑という名だよ」

「……………」

縹はなだの空に薄紅の花びらを向ける。

「“紫苑”、……………か」

この俺に、初めてあんな眼差しを向けた女。

十二 芽生え（後書き）

この回から新章です。

次がいつになるかわかりませんが、書きやすくなって安心して作る者です（笑）

十三 不仲（前書き）

一ヶ月以上遅れて申し訳ありません；

しかも短いです；

十三 不仲

「大丈夫だよ」

そう言っただけ震える手を握ってくれた。

その時、どれだけその人が頼もしく見えたか。どれだけ心強かったか。

阿來に向けられた冷たい瞳がその日は頭から離れなかった。

「紫苑、気にしなくてよいからな」

「阿來…」

どう声をかけていいかわからない私に阿來はそう言った。そのあと、阿來の部屋で楽しくお菓子を食べながらお喋りしたりしてたけど、ずっと違和感があっすぎてこちなかつた。

「姫様、」

芙蓉さんの声に、ハッと我に帰る。

「失礼いたします」

部屋の襖が開けられ、丁寧な動作で芙蓉さんが入ってくる。

「もうすぐ夕餉になります」

「こやかな笑みに、私は勇気を出して尋ねてみた。

「あの、草兼さんと阿來って仲悪いんですか？」

一瞬にして芙蓉さんの表情が曇る。

「その…、何と言ってよいのか私には難しいのですが、夕餉の後でよろしいでしょうか？ 姫様にお話ししなければならぬことも山ほどありますので」

夕餉も皆で一緒にとったけれど、そこに草兼くんの姿は無かった。
「姫様、」

「は、はいっ」

また思いふけていた。そんな私に芙蓉さんは文句を言わず微笑んで、私の部屋に持ってきたひとつの書物と巻物を広げた。

「姫様はあの時、御自身が出された武器はおわかりでしょうか？」

「あの時……って、私が紅隴に鳴弦を放った時の……？」

芙蓉さんは頷いた。

「すみません、大きな弓としかわかってないんです。あの時、急に意識が変わって暗い世界で月読って人に弓を渡されただけで……」

「って、こんなんじや芙蓉さんわかってくれないよ。」

「その世界はこの現実の世界とは全く違って、月読さんは私の中の姫神子が弓の使い方をわかってるって言うって……、その、よくわからないんです」

「……………」

芙蓉さんは微笑んで頷くだけだった。

「大丈夫ですよ、姫様。根の国を統べる神の月読に渡された^{おおもみ}穹の名

は“天麻迦古弓”」

「あまのまかごゆみ……？」

「別の名を^{あまのがこゆみ}天鹿兎弓とも云います。そちらの方が知れています」

「ずいぶん昔に耳にしたような懐かしい気持ちがある。」

「矢のほうの名は“天羽々矢”^{あまのははや}。ふたつとも邪（邪）なものを射る破魔矢、破魔弓です。代々の姫神子はこの弓矢を持ち戦っています。けれど、本来の姫神子の役目は武器を持って戦うことではなく、占いや先見などを行い、皆を災いから遠ざけ幸福を与えることとされています」

「そう言っつて、芙蓉さんは書物をめくる。」

「本来の役目はそういうことになっていますが、姫神子は命を狙われやすい立場です。その姫神子を守るのが鬼討士の役目の一つですが、全員が全員、姫神子の警護に当たるのは難しく、鬼討士も皆が

完璧ではありません」

ある頁^{ページ}を出すと、そこに太く書かれた文字を指した。

「そう、てん……?」

その文字を音読みで読むと芙蓉さんはひとつ、静かに頷く。

「ええ、姫様にはこれから、姫様の懐刀として仕える鬼討士を二人、選んでいただきます」

芙蓉さんの物言いに緊張感が走った。

「その懐刀を、“双天”と云います」

皆が就寝に着く前の静かな廊下を歩く。

「あ……………」

とある角を曲がって自分の部屋に入ろうとする草兼を見つけた。

「……………」

彼はちらり、こちらを見ると無言で部屋に入りぴしゃりと襖を閉めてしまった。

「……………」

毎度のこととは分かっていても、胸に痛みが走る。

いつからこうなってしまったんだろう。

そう思いつつ、小さな足取りで阿來は自分の部屋へと向かった。

「で、お前はどっと思っよ」

杯^{ひやかす}を一つ呷^あって、酒を注ぐよう空になった杯を向けた相手に旺璃至は尋ねた。

向けられた相手は眉を一瞬しかめたものの、すでに旺璃至に文句を言っても無駄と諦めていたようで仕方なく漆器に酒を注いでやる。「どっ思うと言われてもな……………」

自分の杯に酒を注いで一つ、口にする。自分も強いほうだが、旺

璃至は鬼たちの中で切つての酒豪だ。流れて飲めば明日の仕事に影響が出るから気をつけなければ。

旺璃至は酒が入ってるからか……否、普段から大体そうだが、機嫌さそうに聞いてくる。

「だからさ、双天は誰がなるのかってこと」

「……まず言えることとして、芙蓉と伏水、そしてあと一人……」
旺璃至も首を傾げた。

「ああ、俺ももう一人の名前忘れた。すぐにどっか行ってしまったからね」

「とりあえずその三人は無いとして、私が思い浮かべるならば草兼、阿來あたりだが……」

「やっぱり？俺もそう思うんだよねえ」

「しかし、だ。あの二人は私たちと戦っていても違和感が出ている。私としてはあの二人をつけるのは勧めないな」

「まあね」

こういう会話の間にも旺璃至は杯を空にして注がせる。

「……何故、双天を気にする。双天はそこまで重要な戦力にはならないはずだ」

相変わらず旺璃至は勢いよく呷る。

「紅隴の様子が最近可笑しいんだ」

「は……？」

「いや、……今の言葉は忘れといて。今は酔っ払いの戯れことだ」

「はあ……？」

ますます意味がわからない。

「まあまあ、注いでくれよ」

こんな話を聞くためだけに呼ばれ酌しやくに付き合わせられる身にもなってみる。

「注ぐことだけなら女にやって貰え。女くらい山ほどいるだろう」
嫌味を含んだ物言いに旺璃至は鼻で笑う。

「お前だって女じゃないか」

はぐらかされても、私の場合、意味が違う。

「節操なしか。馬鹿兄が」

そう悪態をつき、笑って空の杯を投げつけて、その場を出ていった。

皆が寝静まった頃、一つの小さな影が闇に溶け込むように紛れながら村に近づいていた。

「じゃあ」

両目の色が異なる、真っ黒い猫が。

十四 勅命の如く

“ 双天を選ぶ ”

「 そう言われてもなあ… 」

急に重大な選択を迫られて戸惑わないはずがない。芙蓉さんは気が合う鬼討士を選ぶだけで重くは考えなくていいとは言ったけれど、懐刀に護衛つてわけだからそんな気軽にしていいもんじゃないよね。芙蓉さんに渡された鬼討士たちの名前リストみたいなものを見ているけれど、名前にその人の五行とかが書いてあるだけであってわからない。それに、双天についても書物を数回読んだだけで詳しく理解してるわけじゃないし。

「 鬼討士って結構いるんだな 」

数枚の和紙にびっしりと詰められた文字は達筆過ぎたり、私がいれた元の世界では使われていない文字だったりして全て読めない。でも、その名前の数だけ数えてみると、ざっと五十人はいる。

「 鬼はこの東雲の地にしかないわけではないからのう 」

「 阿來 」

背後から顔を覗かせて鬼討士の名前を丸い瞳がざっと見る。

「 他の地にも鬼討士はおるのだ。紫苑が指名すればチヨクメイの如くすぐに紫苑のもとへやつてくるぞ 」

「 へえ……。ん？チヨクメイって何？ 」

「 詔みことのことじゃ。漢字ではこう書く 」

なかなかピンと来ない私に阿來は和紙にさらさらっと書いてみせた。

「 勅命…？ 」

「 そうじゃな。とてもわかりやすく言うなれば、帝みかど直々の命令じゃ。帝みかどって天皇のことで、直々… って… 」

「あ、やっぱりここ日本なんだ」

今更だけど、改めて確認できた。

「今更何を言ってるのじゃ」

阿來にまで言われるなんて。

「だって阿來が急に連れてくるし、なんだかんだでここが何処だかわかって無かったから。……まあ、言葉が通じるから日本なのはわかってたけど」

じゃあ、やっぱりこの世界は私のいた世界より過去の世界なんだ。村の人や生活を見ると、織田信長とかの戦国時代より昔みただけど……。あ、なら、その時の帝ってけっこう政治とかに携わっていたはずなんだよね。

「阿來っ、なんで勅命の如くなの？鬼討士たちの間なら、別に帝と通さなくてもいいんじゃない？それに如くって」

阿來はきよとんと首を傾けて、

「む？説明していなかったかのう。鬼討士は官吏かんりの一つ、役人なのじゃ」

役人って、たしか公務員みたいなものだから……。そっか、だからここは村の大きさはそんなにないのに人や物資が豊かだったりするんだ。

「紫苑はあまり聞きたくはないであろうが、鬼は鬼と呼ばれるだけあって邪よこしまなもの。穢けがれは片っ端から祓はらって浄化しなければならぬ。

帝のいる都の者は特にそう考えておるのじゃ。紫苑は、陰陽師は知っておるか？」

「うん、詳しくは知らないけど、お札とか使って悪い幽霊とかをやつつける人でしょ？」

「そうじゃ。陰陽師も官吏のひとつで、陰陽師から枝分かれしたようなものが鬼討士じゃ。元々は陰陽師だったが、その陰陽師の中でも攻撃性の高い陰陽師が鬼討士になった。基本的には一緒なのだが簡単に説明をすれば、陰陽師が倒すのが怨霊、鬼討士が倒すのが鬼といったら良いかのう。……むむ、陰陽師は他に占術おしなや呪まじいなどや

るべきことは沢山あるが、鬼討士は鬼を倒すだけ。いやいや、そういうと響きが悪いな……」

阿來は考え込んだ後、はっと話を元に戻した。

「何故、勅命の如くなのかはな、姫神子の立場じゃ」

「姫神子の立場……？」

「うむ。鬼を倒すことは鬼討士にしか出来ぬ技。そして、その才を持つ者もごくわずか。今も、その才を見つげるために各地を巡っている鬼討士もいるのだ。そして、その頂点にいるのが姫神子、紫苑おぬしじゃ。姫神子の立場は帝と比べればるかに帝が上だが、実際は、帝と大して変わらぬ。こう言ってはならぬが、いくら天照大神の子孫と言っても鬼一人、倒すことは出来ないのだ。姫神子が言うことは勅命とほぼ同じ。勅命には逆らうことは許されない。言ってしまえば、紫苑の立場は帝と大して変わらぬ立場なのじゃ」

姫神子って、そんなすごい立場だったんだ……。

「まあ、表向きには帝は偉いからあんまり言っはならぬぞ」

「わかった」

ちょっと焦った様子の阿來に私は笑ってしまった。

「……そうだった！」

「なんじゃ？」

私は鬼討士のリストを確認する。その名前見つけると、阿來に見せつけるなり、

「阿來、私の双天になって！」

「……で、見事に断られたと」

「はい……、意外にも」

私の部屋で凹んでいる私の肩に芙蓉さんがそつと手を置く。

阿來の返答はすぐにあっさり返された。

「双天は二人の相性が良くないと成り立たないから、だそいです」

「なるほど……」

「阿來ならなつてくれると思っただんですけど」

芙蓉さんは困った様子で鬼討士のリストをざっと見た。

「相性というのは五行や十干の相性、性格の相性様々ですから。双天についての相性は一番は性格の相性が重要視されます。私も阿來を推薦したいのですが、本人がそういうなら二人をいつぺんに決めないとならないようですね」

「うーん、誰がいいんだろ」

「ちなみにですが、姫様の五行は土。五行の相性で言えば、火行と金行の鬼討士が良いかと」

「火行は阿來ですよね」

「ええ」

「じゃあ、金行は……」。

「……芙蓉さん、」

「はい？」

「あの二人って元々仲悪くないんですよ」

散った花びらが土に染み入るように褪せて土に還っていく。

「………桜は儂はかない。もう終わってしまったのか」

悲しそうに目を伏せる。

「花は皆儂い。もっと見ておきたかった」

そう呟いて、しゃがみ込むと作業を続ける。

「そこにいたのか、深蓮」

呼ばれ振り向くと旺璃至がいた。相変わらず派手な男だ。

「病み上がりが何やってんだ」

「育てていた薬草を摘みに」

旺璃至は呆れて、

「そういうのは俺とか他の奴に頼みなよ。薬なら香纏に頼めば済むんだからさ」

「自分の怪我ぐらい自分で治したいんだ」

「妙な所で頑固なのはお前らしいというか何と云うか…」

「これくらいでいいだろう」

必要なだけとると、近くの川に行き、土を洗い流す。

「……………考えれば旺璃至、いつから私の屋敷に居たんだ」

「今更だなあ。さっき来たばかりだよ。傷が完全に塞がっていない奴が屋敷にすぐ戻ったって言うから様子を見に」

「傷は塞がった。心配しなくとも大丈夫だよ。今から薬草を乾かしたりするから、屋敷にでも戻っていいよ」

「ん？手伝うけど」

「旺璃至はそう言っただけ前に薬草をひっくり返されたことがある」

「そんなこと言わなくていいじゃないか」

旺璃至は渋々と引き下がって屋敷に戻る。食料を物色されそうだが、まあ、いいだろう。

川から離れ、屋敷の隣にある倉に行く途中に庭を通る。その庭にある小さな池に目がついた。

「今年は開くだろうか」

水面に浮かぶ花の蕾は。

十五 一面

鬼を倒せ。

国のために、帝のために。

この日の国に蔓延ひしる汚れを一掃せよ。

この国を守るため、帝の御身のため。

鬼を片付けよ。

守りたいものがあるならば。

鬼を、殺すのだ。

それがお前の役目。

お前が守りたいならば殺すのだ。

鬼たちを。

「……………」

静寂が行き渡った広い部屋。左右にある障子は全て閉め切っており、薄暗い中、一人の影が立っていた。

「……………」

呼吸をしているのかをも疑うほど動かない。彼の中には“静”というものが憑ついているかと思うほど。

「……………」

ピンと張り詰めた空気の中、この一呼吸が合図だった。

ヒュッと空気を斬る音と共に腰の鞘から一振りを抜く。その流れから部屋の所々に立ててある藁の束を斬る。

床から足を離さず片足を前に出し素早く他の藁を斬りつけ、鋭いさばきで微塵にしてしまう。

「……………雷切っ…！」

刃がきらりと金色に光ってみせた。

「っ……」

薄い闇に一筋の光が走る。空を駆け、藁へと喰いついた。

「……………」

部屋に在った全ての藁を斬ったことを確認すると、体勢を直しながら鞘に刃を戻し、肺に溜まっていた空気をゆっくりと全て吐き出した。

そして、乱暴に一枚の障子開ける。薄暗い部屋に昼の光がさした。

「く…、草兼殿」

「見事な剣の動きでしたな」

「け、けて勝手にのぞき見ていたわけではありませんぞ」

屋敷の使用人たちが焦って口々に言う。…俺はそんなに怖いのか？それに最初からのぞき見られていたのは気配で気付いていた。

「……………おい、」

使用人たちが一斉にびくりと体を揺らす。

「……………悪いが、藁を片付けて置いてくれ」

「は、はいっ」「承知しました」

いそいそと使用人が取り掛かるのを見て、俺は修煉場の部屋を離れようとし、気付いた。

「草兼くん…っ」

着慣れない着物の裾を持って、とてとと走り寄ってくる姿が危なっかしい。というより、何故ここに姫神子がいる。

「草兼くん、やっぱりすごいねっ」

……………のぞき見られていたのか？けど、気配は全く無かったはずだ。

「姫様、草兼はここ東雲の地では一番の剣豪なのですよ」

姫神子の背後から微笑んで芙蓉が現れる。俺だけにわかるよう、片目をつぶってみせた。そうか、芙蓉が気配を消す術を使ったのか。見られて別に問題は無いが…

「動きが早くて見えなかつたよ」

……。
「空気が斬れる音なのかな？」

……。
「全体的な動きが意外にシンプルなんだね」

……結局、姫神子は別に用は無いらしい。

構っているのが面倒になり、姫神子たちを無視して自分の部屋に戻る。

「草兼くんっ!?」

何も言わないまま何処かに行ってしまった。

「ふふ…、大丈夫ですよ、姫様」

芙蓉さんは優しい表情で言った。

「草兼は照れているだけです」

そう、双天を決めるにあたって私は、私の土行と相性の良い、火行と金行の鬼討士にすることにした。

火行は阿来でほぼ決定。で、金行で阿来と合いそうな鬼討士に草兼くん目をつけてる。芙蓉さんに確認してみたら、二人は小さい頃はとても仲が良かったみたい。なんでああなっちゃっているのはわからないけど、元々は相性は悪くないんだからきつと何かきつかけがあれば仲良くなるはず。

というわけで、草兼くんに交渉をしないといけないんだけど。

「草兼くんいつつも機嫌悪そうなんだよねえ…」

また、縁側でごろごろとしてみる。うっかり落ちないように気をつけて。

阿来は畑作業を手伝いに行っだし、芙蓉さんは都に手紙、いわゆる書類を出さないといけないとかで自分の部屋にこもってる。

で、私は草兼くんに双天の交渉をどうするか考え込んでる状態。

「どうしたらもっと話せるかなあ」

草兼くん、よく眉間に皺が入ってるし。

「にゃあ」

「……………猫？」

ガバツと起きて見渡すと、庭の隅の陰にあの黒い猫がこっちを見てる。

「にゃー」

猫は建物の陰に入る。呼ばれたような気がして庭の草履を履いて後を追った。

「にゃ」

建物の陰をのぞくと猫が私がついてきているのを見て歩みを進める。

何処に行くんだろ。

建物と建物の間、建物と壁の間と狭い道を通って抜けた先は屋敷とは違う壁の色をした建物の前だった。

「あれ…？」

気付いたら猫は何処かへ居なくなってた。

「……………ここは？」

建物の周りを見てまわっていると、その建物の戸口からガタンと音がした。別に何も問題は無いんだけど、隠れて様子を見てみる。

「……………」

建物から現れたのは草兼くんで、その手には数冊の書物。……………そっか、ここは書庫なんだ。

草兼くんは私に気づかないで、そのまま何処かに行ってしまう。

よくわからないけど、なんとなく、そのあとをついていってみた。ちよっと頑張つて、実は芙蓉さんに教えてもらっていた気配を隠す術を使ってみる。……………うん、多分うまくいった。

「……………」

草兼くんは何も呟いたりしないで屋敷を進んでいく。

……………あつ。

気がついたら草兼くんは屋敷から出る扉にいた。扉は昼間は開か

れたままで草兼くんはそのまま出てしまった。

「……………」

別に、出たらいけないと言われて無いもんね。

罪悪感をかんじながらも自分を正当化して私は屋敷を出た。

動きやすい着物着てて良かったな。ほっとしながら草兼くんの様子を伺う。片手に書物……………。なんだろう。腰にある刀だけなら練習とかと思うんだけどなあ。

草兼くんは迷うことなくどんどん歩いていく。芙蓉さんに教えてもらった気配を消す術を使っついていった。そして、商店の並ぶ大通りへ出る。

…村つて言っていたけど、意外に人いっぱいいるんだな。

栄えている商店街を思わせる雰囲気。お店からは威勢の良い声が飛び交ってすごく活気がある。そんな人の波に流されないように進んだ。

「あ……………」

いない…。み、見失っちゃった!?

きよるきよると慌てて見渡す。

こついう時に限って、人波は雪崩のようなものに見えてくる。行き交う人にぶつかりながら私は前へと進んだ。

「きゃあ……………」

どこかから幼い女の子の悲鳴。ぱつと見ると、女の子が人波に押しされたんだろう、地面に倒れている。

「お兄い…、お兄い…?」

女の子は倒れたまま周りを見る。それらしき姿はどこにもない。

「お兄い…………、ふええええ」

「大丈夫……………」

駆け寄ろうと、手を伸ばした時、

「どうした?」

聞き慣れた声、だけど聞き慣れない優しく響き。

私がかける前に、探していた後ろ姿が女の子を軽々と抱きかか

えていた。

「兄とはくれたのか？」

「うん……」

「大丈夫だ。泣かなくて良い。すぐ兄は見つかる、俺も探すからなよ。よしよしとあやす様子からかなり手慣れているようで、普段のぶつきら棒な姿からは想像がつかない一面に啞然とした。

「ほら、いたぞ」

背の高さがあるから、見つけ出すのは簡単だったらしい。

「お兄い！」

抱えていた女の子を下ろしてあげると、女の子は走ってお兄ちゃんの所に向かう。

「妹が…ありがとうございますっ！」

妹の無事に安心した顔だった小学生くらいのお兄ちゃんは、すぐにお礼を告げる。その年の割にしつかりした態度に感心していると、後ろ姿はお兄ちゃんの頭の上に手を置き、撫でて、

「ちゃんと妹を守ってやるんだぞ」

お兄ちゃんは大きく頷いて、二人で人並みに溶け込んでいった。

「………で、いつまでこそこそと見てるんだ」

振り返って見てくる声と顔はいつもの草兼くんだった。

「………き、気付いてた？」

「屋敷を出たあたりから」

なんだろ、今までのものが全て崩れ去ったような変な気がする。

その日の晩、

「つまり、五行だったら火は水と相性は悪いけど、火行の丙ひのえと丁ひのうは水行の癸みづのとは相性悪くて壬みづのえなら相性は良いってこと？」

「そうじゃ、壬は湖などきれいな水を指すが、主に水面、水鏡のことじゃ。癸は濁った水で主に空から降る雨のことじゃな。雨は地に落ちると土と混ざり濁るからう」

「……きれいな水でも火を消しちゃうよ？」

「この場合は水鏡なのじゃ」

私は時間があれば自室で阿來に五行と十干について詳しく教えてもらっていた。相性については五行と十干は違う点が多くてややこしい。

「あー、意味わかんないっ！甲きのえが木でしょ、乙きのえが草花、丙きのえが太陽で丁じちのえが地上の炎でしょ、戊じちのえが山で私の己じちのえが田畑、庚かのえが鉄鋼かのえに辛かのえが宝石で、壬きのえがきれいな湖、癸きのえが雨っ！」

「おおっ、全部言えるようになったではないか、紫苑っ」

阿來は喜んでいるけど、私にはこれが限界。すでに何度かパンクしてる。

「阿來…、今日はこれで勘弁して頂戴」

「うむ、そうじゃな、明日からはまた相性についてじっくりと…」

「もう聞きたくない」

「すまぬ」

阿來は苦笑して五行についての書物を片付けはじめた。

阿來は私がこつちの世界に来てから一番心を許せる仲で、こつちに来てそう経っていないのに、もう旧知の仲みたいなかんじになっている。

「……そういえば」

「なんじゃ？」

「草兼くんって、家族に妹ちゃんとかいるのかなって思ってた」

唐突な私の呟きに阿來は目を丸くさせた。だから、今日あったことを伝えると阿來は静かに頷いた。

「確かに、草兼には妹がいると聞いておる」

「そうなんだあ、草兼くん、顔立ち整ってるから妹ちゃんもきつときれいな顔してるんだろうなあ…。阿來は、見たことあるの？」

「聞いただけじゃ。それに草兼の家族はこの東雲の地にはおらぬ」

この時、私は気付いていなかった。阿來の顔にだんだんと陰りが増していたことに。

「そつかあ、じゃあ遠くにいるんだね。見たいな。会えるかなあ」

「それは、難しいかもしれぬ。……まあ、どうしてもとなら姫神子の命令として可能でもあるが」

「そんな命令とかはしないよ」

私は笑ってながした。

「草兼くんが嫌なら無理強いはしないし。……何か、いけなかったかな？」

阿來は実に複雑そうな表情だった。

「その…、いつかは知ることになるとは思っていたがな、」

阿來は私に近寄って耳打ちで教えてくれた。

「草兼は、親に売られた鬼討士」なのだ。

十六 予感

「え……」

私は一瞬、意味がわからなかった。

親に売られたってことは、人身売買されたんだ。

そういうの、私がいた世界では全く無いとは言えないけど、私が生活していた環境では全く関わりが無かった話に現実味を感じれなかった。

「わしが草兼と初めて会ったときには売られた後じゃったから詳しくはわからん。だが、その時の草兼は五つという年にしては、人を射抜くような鋭く強い眼差しをしておったよ」

十年以上前になるんだ。私が五つの時なんて小学校に通う前で、まだまだ親に甘えっぱなしだったのに。

草兼くんはわかってはいたけれど、想像していたよりかなり、ずっと強い……。

次の日の朝、朝餉を終えた後、書庫の倉にさっそく向かってそのことに書いてある書物を探した。

阿来はあれ以上語ってくれなかったから言えないことなのかもしれない。でも、だからと言って知らなくていいというわけじゃないと思っただから。

「なかなか見つからないなあ……」

達筆で書かれている文字を解読するのはけっこうきつい。活字の有り難さをしみじみかんじながら芙蓉さんも大変だったろうなと思う。

始めは人身売買が関係していそうな商売についての書物を見た。人身売買について書いてあるけど鬼討士についてはひとつも書かれてない。鬼討士についての書物や鬼討士たちの名簿など探したけれ

ど、そんなものは見つからなかった。

「阿來が嘘つくとは思えないし……」
ガタン

「姫様、こちらにいらっしやいましたか」

「芙蓉さん」

「何かお探しですか？」

「ちよつと……」

「やっぱり、言いづらいよ。」

「……勉強しようかなって。阿來に教えてもらっているけどまだまだなんで」

「焦りは不要ですよ」

芙蓉さんは優しく微笑んで、

「誰しも、このような知らぬ世界では戸惑いますから。それにお顔の色もよろしくないようですし、」

「えっ、そうですか？」

私、疲れてるのかな？

「慣れない場所で不安なのでしょう。たまには気分転換してみてくださいはいかがでしょう」

「気分転換、ですか？」

「ええ、阿來か草兼か、鬼討士をお供させることになりましたが、村の近くに湖があります。水も澄んでいて今の時期では花が咲きだしているのきれいだと思いますよ」

「へえ、そんな場所があるんですね。行ってみたいな」

でも、今はそんな気持ちにはなれない。多分、芙蓉さんも草兼くんと一緒に鬼討士になった深い理由があると思う。迂闊に入ったらいけないとはわかってるけど、いつかは理解しないといけないことなんだろう。例えばそれが残酷なものでも。

鮮やかな緑を這い、青い空に風が駆け抜けた。

「む……」

その方向を村から離れた場所で阿來は見上げる。鬼のような邪気のない、けれど違和感のある風。

「伏水が結界を作ったかのう……」

「阿來、」

振り返ると口にした名が近付いてきた。その後ろに乙音がついて
いる。

「様子は変わっているか？」

「阿來は首を振った。」

「はつきりとはわからん。だが、何かぼんやりとじゃが異質なものを
感じる」

「それは鬼か？」

「むむ……。自然に紛れてしまつてよくわからぬのだ」

三人はそれぞれ思考をめぐらせる。乙音が口をきった。

「その…、異質というものの姫神子様への影響は……」

「わからぬ…が、紫苑が来てからな、鬼がやたらおとなしくてのう」

「紅隴が倒れたからでは？」

「いや、」

伏水が眉間に皺を寄せていた。

「下等な鬼は上級の鬼の命令をきかない。もうそろそろ来るはずだ」

「しばらくは、全ての村の警戒を強化させましょう」

乙音の言葉に皆、頷いた。

「にゃーお」

黒いしっぽを愉快そうにくねらせ器用に屋根と屋根の間を飛び、
村人を見下ろすように一望する。

その先に見つめるのはあの屋敷。

「にゃあ」

ሌሎችም ሆኑ ለግብይት ስራ ለሚገቡ ሰዎች

十七 気づいてる、けれど...

「おい」

.....

「.....おい、」

.....

「いい加減にどいてくれ」

「どかない」

私は胸を張って言い張った。

屋敷の廊下で自室から出てきた草兼くんをなんとしてでも捕らえ、芙蓉さんが勧めてくれた気分転換に付き合ってもらおう。とりあえず、ゆっくり話し合ってみる、それが出来る場所にいくしかないんだ。きつと気分転換出来る場所なら

草兼くんは眉間に皺を寄せた。見慣れてるけど、やっぱりちょっと怖い。

恐怖を抑えて一呼吸して、

「ついてきてくれないとどきません!」

「なにガキみたいなこと言ってるんだ」

素早く切り返され、なんて言い返せばいいか考えてしまう。

草兼くんはため息をついて、

「警護くらい、芙蓉と阿來をつれていけばいいだろ」

「ふ、芙蓉さんは書類出さないといけなくて、阿來は畑作業のお手伝いっ」

思いつきの嘘を並べ立てる。書類出さないとって、芙蓉さんがOしでパソコン打ってるみたいだ。

「伏水は?」

「ふ、伏水、さんは.....」

普段、何してるんだろ。

後々聞いてみたら、村に結界をつくったり等、鬼の対策とかに務めてるみたい。

「えっと…」

答えれず固まっていると、草兼くんは私の肩を掴んで壁側に動かす。何事もなかったようにスタスタ歩いていく。

「ちよつと待つて！」

置いてかれてたまるもんか！

慌てて追いかけて袖を握る。

「お前何か企んでるだろ」

……、凶星だ。

「たつ、企んでないよ！本当に！」

自分でもびっくりするくらいの嘘の下手さだ。

草兼くんはそれはそれはとつても深いため息をついて、

「どうせ、下らないことだろ」

「何も聴いてないのに言わないでよ」

「だったら、そんなコソコソしないで堂々と言えばいい。俺だって忙しいんだ」

出来るならしてるよ……。それに、今回は絶対に逃がしちやダメなんだ。

「い、忙しいって、何かあるの？」

なんとか会話を繋がないと！

「…それは、その…ちよつとした用事だ」

「用事？ちよつとした？」

「そ、そうだ」

……あれ？何だか様子がおかしい。

「ちよつとしたことなら早く終わったりしないの？」

「まあ、…だな」

「……………」

「……………」

草兼くんの目を見た。その黒い瞳は私から視線をそらす。

「嘘、でしょ」

返事はしなかったけど、しなかった、ということとは私は間違っていない。

「草兼くんも嘘が下手なんだね」

「そんなことは、」

「絶対一緒に来てね」

草兼くんに言い逃れる前に、満面の笑顔でお願いしたおす。

「俺は、嫌だからな」

そう言いながらもついて来てくれるみたいだ。何だかんだ言いながら、草兼くんは優しい。

だから、阿來と仲良く出来るはずなのにな……。

「阿來」

芙蓉は屋敷の出入り口で戻ってきたばかりの小柄な鬼討士に声をかけた。

「ん、なんじゃ」

その鬼討士は大雑把に足を拭くと、すぐ傍の部屋に上がって大の字になってくつろぎ始める。

「そこは客間よ。自分の部屋でくつろぎなさい」

「傍にあるのが悪いんじゃ」

阿來の堂々とした理屈に芙蓉はため息をつくしかかない。とりあえず、周りに人がいないか確認して一息ついて口を開いた。

「阿來、単刀直入に言うわ」

その物言いに阿來は少し緊張を見せた。

「双天になることを断ったときいたけれど」

その言葉に阿來は黙って転がって背を向けた。

「相性とかではないでしょう、本当は……」

芙蓉はその小柄な姿がますます小さくなっていくのを堪え、話を

続ける。

「……本当は、護りきれないと思っているから」

「……………」

阿來は動かない。

「そして、この前に鬼が現れた時に、その自信の無さに拍車がかかってしまった」

芙蓉はしばらく黙った。想定はしていたが、小さな背を責め立てたいのではないが、いつかは乗り越えなければならぬのだ。阿來だけではないけれど、二人共に。

「旺璃至に突き飛ばされ、姫様を鬼の危険に晒してしまったことに、でしょう」

紫苑から断られたということを引きいて、芙蓉はすぐにこのことだと感じ取っていた。さすがの芙蓉でも阿來の身になるのを想像すると心が凍りつく。一番は旺璃至の件だろうが、紫苑をこちらへ連れてきた時も危険に晒してしまった。伏水に懇々と説教を喰らったのもあるのだろう。

「たしかに、阿來はまだまだ未熟な鬼討士であるけれど、立派な鬼討士であることは間違いないの。それに、私も姫様を護りきることに完璧な自信はない。けれど、私の心は、姫様を護り抜くと、あの時強く誓ったわ」

阿來は同じ体勢のままだ。

「……………」 姫様は待つていらっしやるから、間に合わなくなる前に動かないと、もう取り戻せなくなるわ」

それは、二人共に言えること。二人共、気づいてないわけではない。向き合う勇気がないのだ。

芙蓉はそう言い残して、部屋を出た。

「……………」

小さな背はその遠くになっていく足音を聞きながら静かに目を伏せた。

十八 神泉宮にて（前書き）

……めっちゃ更新遅くて申し訳ないです…

十八 神泉宮にて

白の和紙に筆が滑っていく。

「……………うむ、」

書き上げると紙を両手に広るなり、達筆な字を一通り見てその出来を確認する。

「……………」

部屋から見える庭の風景。気持ちの良い空、庭に育つ木の若葉たちとその若々しさを日光に輝かせている。

「せーめー何書いてるのー？」

ととととと愛らしい幼女が駆け寄って隣から覗き込んでくる。

「ん？書簡じゃよ。東雲のほうにな」

「ふーん」

幼女の頭を皺のある手でよしよしと撫でる。

京の北東にある大きな屋敷。その主は京で一番の高齢ながらぴんと伸びた背筋で、姿勢だけ見ればその年齢はわからないだろう。

「さてと…」

墨が乾いたのを確認すると丁寧に折って漆塗りの箱にしまう。

「んう……………」

ふと、幼女が庭に出てるなり空を見上げた。

「どうした、太陰^{たいいん}」

急な様子に老人も庭に降りて空を見上げた。

「あれ」

太陰の指差す方向、老人は目を凝らした。

「……………む」

縹の空に、一瞬、爪で引っ搔いたような白い線が現れ、すぐに消えた。

「あれは…、」

すると、また違う場所に同じような爪痕が出来ては消え、それらを線で繋ぐとまっすぐに結ばれる。それはある場所に向かっているようだった。

「西の方向……、せいりゅう青竜、てんこう天后」

老人が呼ぶとすぐに何処からか若い青年と天女のような格好の女性が姿を現した。

「なんだ」

青年が眉をひそめ、口を開いた。

「今すぐにその書簡を持って東雲に行ってくれ、そして東雲の様子を見てきてほしい。天后は水鏡を芙蓉殿に渡してくれ」

老人が言い終えると、二人は頷き姿を消し、庭に強い風が舞い上がった。

「きゃあっ」

「よっつと」

強風に軽々と吹き飛ばされそうになった太陰を老人ではない手が捕まえた。

「大丈夫か？」

「うん：ありがとう、びゃーちゃん」

泣きそうになった太陰を少年が優しく慰める。一方では、風によるめいた老人を別の手が支えていた。

「ありがとう、勾陳」

そう呼ばれた青年は優しく笑って、

「青竜に周りの様子を見てから風に乗るよう注意しないとイケないな」

「そうじゃのう」

京一の陰陽師は苦笑し、西の空を見上げた。

「私が申しました、気分転換に最適な場所とは東にある神泉宮しんせんぐうの

庭園です」

「神泉宮、ですか」

芙蓉さんが馬の用意をしながら話してくれる。

「はい、大きな泉のある庭園です。水も澄んでいて村とは違った空気が流れています」

芙蓉さんに草兼くんが着いてきてくれると言ったら、嬉しそうにして私も行くとすぐに書類を書き上げてきたみたい。

「きつと姫様も気に入って頂けると思っています」

にこやかに話ながら馬を優しく手懐けている芙蓉さんは絵になるので見とれてしまう。

「姫様は馬に乗るのは初めてですか？」

「え、……えっと、無いですっ」

小さい頃、動物園でポニーに乗せてもらったくらいで、さすがに馬に乗ったとは胸張って言えない。

「大丈夫ですよ。お気になさらないください。あちらの世界で馬に乗ることはなかなか無いことですし」

すると、草兼くんが立派な馬を連れてくるなり、何だかかったるそうに私を見てきた。

「な、何？」

「姫様は草兼の馬で神泉宮に行つて頂くことになっております」

「………はい？」

「え、こ、この馬で？」

「はい、私より草兼のほうが腕が優れていますので」

そっ、そんな…。

戸惑う私に草兼くんは軽くため息をついて、

「ほら、さっさといくぞ」

と手を差し出した。

「う、うん」

私は勢いに押されるままに、その手を掴む。

「そこを空いてる片手で掴め、ここに、足をかけて」

その様子にしては丁寧に教えてくれる。

「上にかかる勢いで足を向こうに出すんだ。手を掴んでるから勢いでやれ」

「よっ…と」

うん、何とかうまく乗れた。

草兼くんは私がつまく乗れたか確認して手を離すと、あっという間に私の後ろに軽々と座って手綱を握った。

「草兼、姫様は乗馬は初めてでいらっしやるから、後ろのほうが掴む場所があつていいと思うけど」

考えてみたら、掴む場所がない。首を掴んだら馬が痛そうだし。

「馬鹿、何言つてんだ」

「私、掴むの無いと落ちちゃうかも」

「鞍のどつか掴んでろ」

「鞍つて、…掴む場所無いからっ」

何でだろ、草兼くんの顔が赤い。

「お前な、後ろで掴むって意味わかってんのか」

「え？意味とかあるの？」

私の返事を聞いて深々と息を吐く草兼くん。意味を理解出来ないまま、芙蓉さんに目で助けを求めると、

「その…、後ろからと言えば、抱き着く、という形になります」

「ぜ、絶対に嫌です」

……なんとか、神泉宮に着きました。来るまでに芙蓉さんがつけてくれた馬具に掴まって、草兼くんも安定するように馬を走らせてくれて。ちょっと疲れたけど、それを忘れさせるくらい、神泉宮は綺麗だった。

「すごい……」

澄んだ縹色の空が上下に二つある。実際は下の空は泉が水鏡で写したものだけれど、その広大さが空が二つあると思わせた。そ

して、泉の際には泉にまで入るほど草花が溢れ、泉から少し離れた所から木々が繁り、青と緑の美しい自然の姿が在った。

思いつき深呼吸をする。

「……やっぱり空気もおいしい！」

「姫様に気に入って頂いとあれば、水も花も喜んでおりましょう」

泉のすぐ傍に小さな屋敷があつて、一室が泉に突き出た水の上にある部屋に私たちはくつろいでいた。

芙蓉さんが、持ってきた荷物をから漆塗りの重箱を私の前に出す。「軽食を厨房の者に作らせました。よろしければお召し上がりください」

蓋を開ければ三色の小さいおにぎりや焼き魚、煮物に漬物など食べやすい大きさのものが色とりどりに盛りつけてある。

「すごい、煮物の人参お花型に切つてある」

芙蓉さんは微笑みながら、もう一つ重箱を出すと草兼くんに手渡した。草兼くんは私から少し離れた後ろで蓋を開くと黙々と食べはじめた。

「……なんだか、可愛らしいな。」

草兼くんには物足りなさそうなお弁当をちまちま食べる姿は彼に似合つてないようだけれど、愛らしくて。

「……………なんだ？」

「な、なんでもないっ」

視線に気付かれ不信そうに見られて慌てて顔を泉に向けた。不思議そうに見ながらも、草兼くんはすぐ食べ終わると何も言わず泉を眺める。

本当に美しく、不思議な場所だった。水なのに張り詰めたような水面が心に静寂と緊張を与えてくる。精神の奥底で何か研ぎ澄まされていく気がして、自然と背筋を伸ばしていた。落ち着いて静かに呼吸を繰り返すほどに、体が透明になっていくような不思議な感覚。これが清める、ということなのかなと思つてしまう。体の深い深い奥底にまで、優しく澄んだ手が入り込んで芯を掬っていかれて

しまつような。隠しているものを全て見抜かれてしまいそうなの……ふと、あの小さな子を思い出した。私は助けてあげられのかな。あの時だけでもいい、覆いかぶさる草に呑み込まれていったあの子……。

『鬼は、花には成れない』

「……………花……、」

紅隴の、あの言葉。

「…花が、どうかなさいましたか？」

芙蓉さんが顔を覗いてきた。

「あ、その…咲いてる花がきれいだなって」

うっかり言葉を漏らしてたみたい。気をつけなきゃ。

「……………」

すると、それまで眠たそうに座っていた草兼くんが立ち上がるなり、空を睨む。

「どうしたの？」

草兼くんは答えず、遠くを見つめたまま。芙蓉さんが私の前に出て、どこかを見つめた。それまで張り詰めていた水鏡が波打つ。

「……………誰だ？」

芙蓉さんが風に訝しみながら尋ねる。

一瞬、強い風が屋敷を襲った。目をつぶってしまう私を芙蓉さんがかばってくれる。

「お久しぶりにございます、芙蓉様」

風が収まっていくと同時に優しい女性の声が聞こえた。

ゆっくり、目を開けるとそこに、天女のような身なりの女性と青い衣を纏った若い男の人が立っていた。

女性は私の前に進むと跪いて丁寧に頭を下げる。

「初めてお目にかかります。私は十二天将、天后、この者は同じ十二天将の青竜と申します。我らが主、あへのせいめい安倍清明の命により馳せ参じました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5855k/>

紅隴 -べにおぼろ-

2011年12月13日01時49分発行